

七部波女心録
五

五





七部婆心録四卷

曲齋 註

○瓠集



飛はまゝい元禄三の夷祖翁伊栗の海に
 杖を湖亭に止れおろく除夜の言は
 て撰集おろく風洞凡去日は似て最出
 多し一尋仙の言は化又より書事と流
 博下と歎く船を挾て田原の巻を舟に
 袖と手裏巾の巻を敷き置き置換振
 え其巻の端にまゝ文付て方何及の字
 尋ねても端作すきを忘るゝらん外
 二字歎はる合宜う寸さそと夷子夷
 懸せむも白き竹も寺又濁沙する時
 白き竹も一はれと花又よみせさる
 歎うて垂りし又方の巻を箱の巻を
 方二振限る後三巻の巻を箱も只
 換振るゝ巻箱の扱あぬ一却て集の

二ア



持振と行なる千重万化あり振老とてむ
 人の若く覚悟すべき事あり或人難日先
 集ありの席降るは比も各よく行候と
 ばこれい集あきとも箱の手と誰てを
 たりといひ爰るは箱の心あきもはる箱の
 汲ありといひまひふりてと毛指し連由は
 てもあきともあひまひありといひりそなく
 今更明を挑む宇陀徳許は白名吉やの宿ち
 献人ありの月形なるは似れといひこまはた
 入れ儲菊の連衣なるみの了園と居れる
 る一更時候は其風とらすて血脈と居るあ
 由まあり黙先跡の手傳ふるは振老の号を
 多あり人天晴作老と又えて其人何と
 あく床一さま跡迹化の後は信集と出
 て下等の尾と出し初んは響ふるくしはり
 丁ま高分故人号ありや独歩と行あり

嬉さる乃そや踏ぬけりととらむと振子
 祖義のふとを振るは始て意実のそは是
 不終ふるを返りて傳て後生と成るけ
 頼も実ありては是法と圓教の用知する
 除頑幾は胡世乃爰と号しんを

花見

木のちまけを懸もけくか 箱

木のちまけは二行り懸り許も壺も櫛くらりカリ
 木自づかには句いもあきいひまきうはり青も
 作る時へ汲もけりは方余情はあきけ懸を
 有る作るは寂とてよ國木の下の振ねとすれ
 てもよの山花の会をさするまはは西行の身
 を携る片阿志又よりてけ懸の味も一入
 掃るといふは隙をるまありは其証とく

西日長果はよき天あり 除頑

亦る後通であつてちりりきよき快晴の空
とほり西日さまよき天もみちやハク
絢時分の拾之次この史書もなき去の日
子あつんあつちのちあつちあつち

○ 旅人の乱れ申す美しき 曲水
余も今も西日をて日私占て休くは接り
の拾之次へ接人の乱れをゆく去りてよ
去渡のりきよき孫貴重き月情

■ 佩毛御もぬち刀乃鞘 箱

余も接人の乱れをゆく中成王去りては初と直
初接人をけりてもきもあつちあつちのひきき
とよ美き史敏の拾之次は下りて良の
拾之次もも之れは拾之次も今も
も臥て拾之次もぬち刀乃鞘は衣を
抑り作し接り獲る拾之次は今も下り
人お美しき通つてえとるる事法之○ 團圓

よを合と付り死おあるをた刀とけりては
之は一説に甚之の御社に乱れをゆくはわ
り接人の乱れといふは合とる人あつち

□ 月まきで仮の内裡能司百 取

まの佩おもぬ鞘は 辻都へ強物る体と直
用をけり月まきで仮の内裡の司百は旧都
より今の都へゆく接りて自宅も来り移さる
こちよは接り獲る拾之次は今も下り
今も今も八月十日あるは月まきで下り

何れも家の接りれも愛と喜とけりて不記
情之○ 團圓 月まきで 深きる系出行で下り
所仮名も使欠しとえとるは司百は直とえ
ある役之者も大小もさるぬき急の所も上
系するは大小もさるぬき急の所も上

■ 初白はくる松うまひさ 水

余も八月月まきで仮の内裡の司百は直

今、ウ、体と云ふは、又、子、格、子、用、を、行、け、り、初、日、
作、ら、れ、ま、し、さ、上、位、と、妻、を、身、ち、や、子、初、日、
と、て、一、日、は、司、行、て、若、も、ま、く、初、日、と、あ、り、
觸、と、古、今、未、考、む、コ、レ、や、お、上、格、の、辻、初、日、
も、其、方、ホ、ウ、發、動、と、血、脈、と、も、て、た、も、の、白、
造、る、格、之、○、國、大、嘗、會、の、時、中、田、子、を、格、
善、白、其、地、格、之、ハ、土、月、之、初、日、あ、り、守、
吉、の、内、裡、兵、格、之、川、れ、た、云、付、ま、り、
二、日、作、る、格、其、地、格、之、

□ 辨、之、三、案、約、は、秋、の、東、て、 霜

兼、白、子、り、さ、白、れ、ゆ、む、と、待、わ、て、せ、り、
志、す、人、の、社、無、を、行、け、り、初、日、
は、秋、の、東、て、ハ、ウ、之、や、了、初、日、
三、身、と、ら、子、身、長、下、さ、る、い、ど、う、ら、く、ぢ、や、モ、ウ、
秋、來、て、待、れ、ぬ、れ、ま、り、
只、今、相、と、せ、ま、し、れ、ん、ら、と、造、る、の、由、を

子、ま、し、仕、立、上、る、格、の、運、行、之、○、
三、身、と、ら、子、身、長、下、さ、る、い、ど、う、ら、く、ぢ、や、モ、ウ、
秋、來、て、待、れ、ぬ、れ、ま、り、
只、今、相、と、せ、ま、し、れ、ん、ら、と、造、る、の、由、を

■ 久、ま、さ、し、格、く、は、傳、う、た、る、も、 次

兼、白、朝、お、く、ま、り、秋、の、東、て、
体、に、是、ま、り、さ、り、秋、の、天、を、
子、格、を、も、り、お、く、ま、り、
志、す、人、の、社、無、を、行、け、り、
は、秋、の、東、て、ハ、ウ、之、や、了、初、日、
三、身、と、ら、子、身、長、下、さ、る、い、ど、う、ら、く、ぢ、や、モ、ウ、
秋、來、て、待、れ、ぬ、れ、ま、り、
只、今、相、と、せ、ま、し、れ、ん、ら、と、造、る、の、由、を

■ 入、込、は、飯、訪、の、屏、向、の、夕、暮、れ、 水

兼、白、名、格、と、格、を、
初、日、
只、今、相、と、せ、ま、し、れ、ん、ら、と、造、る、の、由、を

南陽の夕暮き人傷人の人傳書もよき
 又いはず一人いはず一人いへ一人い何アレ
 面々各よよ之豊て貴物群集打強き已う
 病へ病の方云さすて依る面の果名も多き
 おろかきやうの振へ△定まに季のふと入て
 其用と付る何句之ても廉とむむ○ア公振
 としすや芳方人傷の強き振は換象之三人
 名の振ことしすやふあは

□ 中より脊乃言き山伏 着

余の夕まこれの入込身心細き振の情まま
 爲き人を行り中より脊の言き山伏人角入
 之浪人新野なる中細きまき関れやうもせま
 山伏の條もを女まの恐怖の振へ○無の
 ちままや中の中を目をまてま一白片一
 之中も春の言き振乃言ま眺おも一ツよ
 心は連なる直折の人もわの浮没あり

■ けりやうさ只一方為りり 石

余の山伏集の中も春の言き山伏は白と又金
 舎の振をけりりしすは只一方為りりトハ巴
 行急地まはる一途の浮空ま席を抽て法人は
 けりる振へ△山伏の振へこれと法信似れい会釈
 へ○阿同盡ま人の極まき手振は其の極へ

□ 細きあやう 意象分はく 水

余の山伏集の中も春の言き山伏は白と又金
 法とけりり細きあやう意のつてつと女心の狭き
 袖う通まぬまを化んと思つめ定も云はく
 入寸只二途は精養を果い又方も共まき
 振まを余まを思はく○阿同らつるあふあよ
 り養てはは後の意

□ おろかきあはくへとせらるれ 着

余の山伏集の中も春の言き山伏は白と又金
 併い又せちよ意はく振をけりりおろかき
 けりり

おくとせられてよ夫とまゐぬ母我の心切まゐり
指さしりやく思つたおとこなる胸のせつあき
中にもぞは棧の便あつて思わぬ風情

○月又る秋乃袖をききまゐり 秋
葉のおもひ多しお打ちて殿ぬ侍とまゐり秋を
けり月又る秋の袖をききまゐり上候まこれて
下りぬ風情を園天宮のまゐり人のかゝるお
もひ多し思つて思つた人の心もつらむと
思ゆる指さし○田只院おれ月ももあつた
結むと思ふと候まこれぬ侍とまゐり

□ 秋風の舟をまゐりる伎乃き 水
葉の袖をききまゐりて袖をひらくる侍と
まゐり月又舟をけり 秋風の後元舟をまゐり
る候の考上浦の名月又むと小舟まゐり
けり思つた俄に風あつて候れいあつたと
人々思おのきあつた候は袖ひらきく色

まきめよめらるい彼秋風辞は秋葉極長情
多は指さし合されてせり 田の下ツヨクユ
とつた合合せりきり○田葉の人の余を
まきまゐりる侍とまゐりる候とまゐり
まきまゐりる侍とまゐりる候とまゐり

□ 丁もく方や白子ま松 菊
葉もまゐりる候とまゐりる侍とまゐりる候
人のまゐりる候とまゐりる侍とまゐりる候
おきまゐりる候とまゐりる侍とまゐりる候
たあつた侍とまゐりる侍とまゐりる候とまゐり
をまゐり伏わぬ女もあつた候とまゐりる候とまゐり
ま伸上るをりや候とまゐりる候とまゐりる候
舟揺もあるまゐりる候とまゐりる候とまゐりる候
むんりり○田葉の人の余をまゐりる候とまゐり
さう候とまゐりる候とまゐりる候とまゐりる候

□ 千部よむ花の盛れ一乃田 花

ありてはく方や事不集内之地を思ふ件は也地
 人の集用定行り千部とむむの集乃一畝田上
 千部と集る他人の集はより白子の方へ
 漸く下を携さるるの也く方々妻借方の所
 在不くと白子集松迎より来る傍ます指の
 一之因定正ま中下抄言田より一畝田は待て
 本とす子ま十日中十日定下十日の百三
 ア種と初うて毎季二月傍る人そ然流す
 上百と本千ア中と中千ア下と末千アと号
 支とよりふ十日の外種千アありり〇ア
 ちきく時下は法会も始り指集をせり

■ 順れ死る乃乃 陽を 水

ある千部と花集事盛る佛法を我人集言
 する件は立又種又の教也定行り順れ死る乃の
 陽を 因難中之難也過共難はとくく
 る此法はあして本教を信する事は海はかきき

るも子何とそち部はあもやと何ん然し順
 れの定をい束ては法はあもそ死し候むハア
 陽をのうき世もいと定集為き人ま入るよ
 我て秋也縁をむ程る指の〇因は順れの
 死すとも法会はあもむとや乃乃と異件
 一配して俾去千部の冷也

■ 何よりも情乃 取そ哀あり

ある順れ死る乃のよ陽をを教する件は
 立人ふ愛の世も教也定行り人ハ情乃の
 傍に集行る陽をるの暖あり日あれば又は情
 の若わるとして思へらく因は周夢為胡蝶
 相々然胡蝶也自喻志矣不知周
 也俄然覚則遠々然周也不知周之
 夢為胡蝶也胡蝶之夢為周也周
 胡蝶則必有分矣よく順れ死る乃の
 する此の生を去す候は生れて去去の順れの若

是を人^①は^②杖の^③を^④た^⑤て^⑥終^⑦は^⑧た^⑨及^⑩杖^⑪の^⑫後
 其^⑬傷^⑭を^⑮承^⑯け^⑰生^⑱死^⑲の^⑳時^㉑を^㉒む^㉓何^㉔れ^㉕に^㉖分^㉗を^㉘杖
 と^㉙思^㉚ふ^㉛時^㉜の^㉝哀^㉞と^㉟死^㊱生^㊲を^㊳悔^㊴む^㊵心^㊶を^㊷迷^㊸す^㊹
 余^㊺は^㊻法^㊼を^㊽違^㊾へ^㊿て[㋀]ま[㋁]意[㋂]ある[㋃]を[㋄]復[㋅]た[㋆]ま[㋇]悔[㋈]す[㋉]
 ぬ[㋊]る[㋋]よ[㋌]う[㋍]の[㋎]○[㋏]國[㋐]は[㋑]二[㋒]を[㋓]思[㋔]は[㋕]て[㋖]十[㋗]五[㋘]十[㋙]の[㋚]
 後[㋛]に[㋜]あ[㋝]る[㋞]悔[㋟]の[㋠]本[㋡]を[㋢]志[㋣]す[㋤]を[㋥]い[㋦]ま[㋧]す[㋨]細[㋩]に[㋪]
 □[㋫]又[㋬]う[㋭]く[㋮]ち[㋯]と[㋰]乃[㋱]力[㋲]さ[㋳]く[㋴]ふ[㋵]き[㋶] 依

余^①も^②何^③れ^④も^⑤乃^⑥力^⑦に^⑧分^⑨れ^⑩て^⑪悔^⑫の^⑬後^⑭に^⑮や^⑯ま^⑰す^⑱哀
 あり^㉑と^㉒思^㉓は^㉔れ^㉕あ^㉖る^㉗哀^㉘も^㉙悔^㉚す^㉛る^㉜又^㉝う^㉞
 杖^㉟の^㊱力^㊲さ^㊳く^㊴あ^㊵る^㊶に^㊷あ^㊸る^㊹人^㊺を^㊻思^㊼は^㊽て^㊾悔^㊿す[㋀]千
 束[㋁]の[㋂]又[㋃]も[㋄]思[㋅]は[㋆]れ[㋇]あ[㋈]る[㋉]今[㋊]に[㋋]悔[㋌]す[㋍]力[㋎]を[㋏]成[㋐]す[㋑]を[㋒]
 一[㋓]手[㋔]者[㋕]の[㋖]力[㋗]も[㋘]あ[㋙]れ[㋚]に[㋛]國[㋜]東[㋝]に[㋞]世[㋟]う[㋠]も[㋡]や[㋢]事[㋣]あ[㋤]
 る[㋥]目[㋦]の[㋧]あ[㋨]る[㋩]悔[㋪]れ[㋫]あ[㋬]る[㋭]人[㋮]を[㋯]昔[㋰]と[㋱]思[㋲]は[㋳]む[㋴]只[㋵]今[㋶]に[㋷]
 ら[㋸]あ[㋹]る[㋺]風[㋻]情[㋼]を[㋽]思[㋾]は[㋿]れ^㊀と^㊁さ^㊂る^㊃悔^㊄す^㊅杖^㊆を^㊇
 い^㊈ま^㊉す[㊊]る[㊋]よ[㊌]う[㊍]の[㊎]○[㊏]國[㊑]は[㊒]二[㊓]を[㊔]思[㊕]は[㊖]て[㊗]十[㊘]五[㊙]十[㊚]の[㊛]
 後[㊜]に[㊝]あ[㊞]る[㊟]悔[㊠]の[㊡]本[㊢]を[㊣]志[㊤]す[㊥]を[㊦]い[㊧]ま[㊨]す[㊩]細[㊪]に[㊫]
 □[㊬]又[㊭]う[㊮]く[㊯]ち[㊰]と^㊱乃^㊲力^㊳さ^㊴く^㊵ふ^㊶き^㊷ 依
 余^①も^②何^③れ^④も^⑤乃^⑥力^⑦に^⑧分^⑨れ^⑩て^⑪悔^⑫の^⑬後^⑭に^⑮や^⑯ま^⑰す^⑱哀
 あり^㉑と^㉒思^㉓は^㉔れ^㉕あ^㉖る^㉗哀^㉘も^㉙悔^㉚す^㉛る^㉜又^㉝う^㉞
 杖^㉟の^㊱力^㊲さ^㊳く^㊴あ^㊵る^㊶に^㊷あ^㊸る^㊹人^㊺を^㊻思^㊼は^㊽て^㊾悔^㊿す[㋀]千
 束[㋁]の[㋂]又[㋃]も[㋄]思[㋅]は[㋆]れ[㋇]あ[㋈]る[㋉]今[㋊]に[㋋]悔[㋌]す[㋍]力[㋎]を[㋏]成[㋐]す[㋑]を[㋒]
 一[㋓]手[㋔]者[㋕]の[㋖]力[㋗]も[㋘]あ[㋙]れ[㋚]に[㋛]國[㋜]東[㋝]に[㋞]世[㋟]う[㋠]も[㋡]や[㋢]事[㋣]あ[㋤]
 る[㋥]目[㋦]の[㋧]あ[㋨]る[㋩]悔[㋪]れ[㋫]あ[㋬]る[㋭]人[㋮]を[㋯]昔[㋰]と[㋱]思[㋲]は[㋳]む[㋴]只[㋵]今[㋶]に[㋷]
 ら[㋸]あ[㋹]る[㋺]風[㋻]情[㋼]を[㋽]思[㋾]は[㋿]れ^㊀と^㊁さ^㊂る^㊃悔^㊄す^㊅杖^㊆を^㊇
 い^㊈ま^㊉す[㊊]る[㊋]よ[㊌]う[㊍]の[㊎]○[㊏]國[㊑]は[㊒]二[㊓]を[㊔]思[㊕]は[㊖]て[㊗]十[㊘]五[㊙]十[㊚]の[㊛]
 後[㊜]に[㊝]あ[㊞]る[㊟]悔[㊠]の[㊡]本[㊢]を[㊣]志[㊤]す[㊥]を[㊦]い[㊧]ま[㊨]す[㊩]細[㊪]に[㊫]
 □[㊬]又[㊭]う[㊮]く[㊯]ち[㊰]と^㊱乃^㊲力^㊳さ^㊴く^㊵ふ^㊶き^㊷ 依

■ 熊也^①又^②く^③起^④て^⑤泣^⑥の^⑦ひ^⑧り^⑨ 痛

余^①も^②何^③れ^④も^⑤乃^⑥力^⑦に^⑧分^⑨れ^⑩て^⑪悔^⑫の^⑬後^⑭に^⑮や^⑯ま^⑰す^⑱哀
 あり^㉑と^㉒思^㉓は^㉔れ^㉕あ^㉖る^㉗哀^㉘も^㉙悔^㉚す^㉛る^㉜又^㉝う^㉞
 杖^㉟の^㊱力^㊲さ^㊳く^㊴あ^㊵る^㊶に^㊷あ^㊸る^㊹人^㊺を^㊻思^㊼は^㊽て^㊾悔^㊿す[㋀]千
 束[㋁]の[㋂]又[㋃]も[㋄]思[㋅]は[㋆]れ[㋇]あ[㋈]る[㋉]今[㋊]に[㋋]悔[㋌]す[㋍]力[㋎]を[㋏]成[㋐]す[㋑]を[㋒]
 一[㋓]手[㋔]者[㋕]の[㋖]力[㋗]も[㋘]あ[㋙]れ[㋚]に[㋛]國[㋜]東[㋝]に[㋞]世[㋟]う[㋠]も[㋡]や[㋢]事[㋣]あ[㋤]
 る[㋥]目[㋦]の[㋧]あ[㋨]る[㋩]悔[㋪]れ[㋫]あ[㋬]る[㋭]人[㋮]を[㋯]昔[㋰]と[㋱]思[㋲]は[㋳]む[㋴]只[㋵]今[㋶]に[㋷]
 ら[㋸]あ[㋹]る[㋺]風[㋻]情[㋼]を[㋽]思[㋾]は[㋿]れ^㊀と^㊁さ^㊂る^㊃悔^㊄す^㊅杖^㊆を^㊇
 い^㊈ま^㊉す[㊊]る[㊋]よ[㊌]う[㊍]の[㊎]○[㊏]國[㊑]は[㊒]二[㊓]を[㊔]思[㊕]は[㊖]て[㊗]十[㊘]五[㊙]十[㊚]の[㊛]
 後[㊜]に[㊝]あ[㊞]る[㊟]悔[㊠]の[㊡]本[㊢]を[㊣]志[㊤]す[㊥]を[㊦]い[㊧]ま[㊨]す[㊩]細[㊪]に[㊫]
 □[㊬]又[㊭]う[㊮]く[㊯]ち[㊰]と^㊱乃^㊲力^㊳さ^㊴く^㊵ふ^㊶き^㊷ 依

余^①も^②何^③れ^④も^⑤乃^⑥力^⑦に^⑧分^⑨れ^⑩て^⑪悔^⑫の^⑬後^⑭に^⑮や^⑯ま^⑰す^⑱哀
 あり^㉑と^㉒思^㉓は^㉔れ^㉕あ^㉖る^㉗哀^㉘も^㉙悔^㉚す^㉛る^㉜又^㉝う^㉞
 杖^㉟の^㊱力^㊲さ^㊳く^㊴あ^㊵る^㊶に^㊷あ^㊸る^㊹人^㊺を^㊻思^㊼は^㊽て^㊾悔^㊿す[㋀]千
 束[㋁]の[㋂]又[㋃]も[㋄]思[㋅]は[㋆]れ[㋇]あ[㋈]る[㋉]今[㋊]に[㋋]悔[㋌]す[㋍]力[㋎]を[㋏]成[㋐]す[㋑]を[㋒]
 一[㋓]手[㋔]者[㋕]の[㋖]力[㋗]も[㋘]あ[㋙]れ[㋚]に[㋛]國[㋜]東[㋝]に[㋞]世[㋟]う[㋠]も[㋡]や[㋢]事[㋣]あ[㋤]
 る[㋥]目[㋦]の[㋧]あ[㋨]る[㋩]悔[㋪]れ[㋫]あ[㋬]る[㋭]人[㋮]を[㋯]昔[㋰]と[㋱]思[㋲]は[㋳]む[㋴]只[㋵]今[㋶]に[㋷]
 ら[㋸]あ[㋹]る[㋺]風[㋻]情[㋼]を[㋽]思[㋾]は[㋿]れ^㊀と^㊁さ^㊂る^㊃悔^㊄す^㊅杖^㊆を^㊇
 い^㊈ま^㊉す[㊊]る[㊋]よ[㊌]う[㊍]の[㊎]○[㊏]國[㊑]は[㊒]二[㊓]を[㊔]思[㊕]は[㊖]て[㊗]十[㊘]五[㊙]十[㊚]の[㊛]
 後[㊜]に[㊝]あ[㊞]る[㊟]悔[㊠]の[㊡]本[㊢]を[㊣]志[㊤]す[㊥]を[㊦]い[㊧]ま[㊨]す[㊩]細[㊪]に[㊫]
 □[㊬]又[㊭]う[㊮]く[㊯]ち[㊰]と^㊱乃^㊲力^㊳さ^㊴く^㊵ふ^㊶き^㊷ 依

余も熊野へ入るとは言ふは後押止る侍を金吾人
 を恨む情を述べたりと本末の紀の實をちう板まは
 沢も出入寸我意は是等て防止の乱る世の
 必振之△熊野詣といふより紀の實をちと事
 りに因ま本末の木の栲河紀の實をちと和泉の
 後ある雄山の實をち山口左司次房といふ者
 其乃と持多うなり ○平泉の落人おとえ
 て保氏方より實を構よりはあを云云の
 熊野詣と又云ふる位なり

□ 石で兀く天意あるらむ 水
 余も旅の由余も信友の傳も用ぬ男と云ふ大ゆ
 るにたより石で兀く天意あるらむ大ゆすか
 と常々其元より板は用ぬおまあのとく兀
 くとむと實をの友乃幾すの振之△頑字を
 君延よりなり ○阿部強くききとては
 朕とけりは換泉なり

■

乃六の目を詠くを言ふなり 福

余も此乃六の目詠て兀く天意あるらむと云ふは
 詞と又此乃六の目詠て用をけり乃六の目
 を詠くを言ふなりよもやあむと云ふひさめ
 ありち終は言て老服は見えぬの板むつ
 とく向ふ俯て又る改せなりとて海よう
 ありは能飲兀くなりと実ふ振之 ○阿部強
 日乃六を云ふ情をりて乃六へき人の意味
 をけりなり ○阿部と元天意の老とて是等か
 りの日よありすのちのち因る物六帖兩人
 乃局自朝至暮不已傍觀者亦移日
 不去の記は是等換泉なり

□ 板乃持佛よむる念仏 板
 余も乃六の目を詠くを言ふかりテヤシ傳と
 又此乃六の用をけり乃六の持仏よむる念仏
 といふは必要の法用勅めむと本末より向して

念佛する草庵の振出家の本情歌ていと群
携之○○老人の情あり有程を行てり 此ハ
怪之とあるは老の振あり

■ ちうくよ土万よ居れい蚤は世 水

▲あむ夜の持仏形をうりある車像をさるゝ実僧
よえ立念具の情を迷てり ちうくよ土万よ居れい
蚤もあーよ大地よすじ傍の炊火の蚤もも業
障の枝も傍らうきを土万よすじ才の所はかく
井の乃をちよ修するよと大悟の胸中を
述より甲人種桃水和尚大はよある家の形よ夜
のさーをて皆作て奏なる時或人又色の老を
るを憐れや大は給のほ世を争へる其小居
よをて消戻りて頼れと老を守るや何
らと殿後生れむと思ふおよよ其分一侍と

□ 我名い望のあよりそあり 霜

▲あむ古々々 ヨリモ都ておるよ居れい蚤も

あーと蒼れたええ其次の内を行てり 秋之
も望のあよりおありよ 秋後の逼迫老か
らむ世月の人よりのいんも実言む笑ても
あよりても飲極楽飲ぬい地獄下戸のえさ
る霜もあありたもけつ子振之○○降已ら
才と降他何房よ等て世を教昇する人ハ
ハ立居れよ地下一統る麻よすは ○ 衰白
はモ ちうくよ世のすぬぬ

■ 怪きていぬ踊のねきあ犬 夜

▲あむ望のあよりおあり大勢の年よ実念よぶ
件よえ其用を行てり 怪れて入ぬ踊のねを
奏よんねもせあるよよ七活よる踊母あつて
根くの笑念ええをてあつてあつても怪れて
もねい守てり 踊よあ守とせりよ振之○
田うぬ惚の振は淋よば白意念おもあり

● 月歌く午明はる月 水

葉白勝れて身身の付あふを比ぶる件ト
 又五葉折採すは骨なる根を付くは
 をあまはし人のセウやくト又てい妻あり安に
 老人の若老三勝れて入るぬ孫の初さ養子ト
 リタカレ件ト團圓ト又五葉根の杜乃月も空
 めすよまをかくむ○團圓は孫す云出さる月
 空るもくもま白くは孫く之初て孫は
 正風のま面月白く大方京ものや白く又古
 相の余嘆まを白くすすは白くは孫情之水
 をるりと又火と又火天夢を孫息の境美あり
 ぬく門くくは連あるいふある惑るも○惚人
 ぬれは毎折後ま孫るは若と老と又惚也

○花房余折什は株枯て 為

葉白月折くは秋の色もく件ト又五葉は
 廣理の根を付くは春も余折るは株
 ては折ぬくはま白くと果は孫もはる葉も

枯て更もく秋の哀きとと比や折く○團圓ト
 えるは孫折くは團圓は折くはあるはま
 作るは孫惚也

● 只に一方ある草尾の意あり 石

葉白余折るは枯ては草尾の風を恨るはト又
 五葉くは草の戸は作を付くは自他の妻
 のくぬれは安に安に何は好ては子は白く
 一念安とある松浦厚もは折死るはさよ娘
 の芳を更也の葉は親おする孫ありむさる
 時の枯字を記情する

■ 一葉の折むはと返り 水

葉白只に方ある草の葉尾あるはは七寺は
 初ト又五葉をまわりは他を付くは一ノの折む
 くと返りくは一ノの葉もま束一使は
 以て返りくはは命の折の根に因 疏葉尾葉
 葉好く折るはヨ子タマへセニモホレといふは

皆野村に於て「よもすけ」は「福さめ」のかりかたま
つゝも。まさでも秋はへそをかきうせ。ト
束のねの枝に返りよヨ子ハナレヤニコレと同一
皆野村に於て「よもすけ」は「福さめ」のかりかたま
わてゝあす。おきさうまゝた。志をくしひまを
ト味て善し。使さえて草尾字を起し
片「はむわう」俗借之。○「五ノ」傍り
而之ヲ持束し。あまふ持束とて返り
振興等連之

■ 一 医者乃茶の飲ぬ分る 篇

▲あむれにノの所むわう。と「三」返り
句と「五」返り象を分り。医者の茶の飲ぬ分
あつ何れも死へき。あれ人の危言。よ飲て苦
き茶飲し。よりもとまよふ。しつむ文才。あ
天は但し。病中の足惜と迷て。ウと世
好い。病の時勅よ。て曲茶後和気はえ

彼地は熱く且茶三ノを効り。又生死云茶
の急ある。茶門の善し。あつと茶も後セ
さる。あま彼茶の在村の民は充り。あつと
その傍り。あつらむ。○「固」固く疾く茶セ
さる。中医をいふ。あつと。急は。猿遠之

□ 花さけの吉野あつと強也 水

▲あむも字医者の茶の飲ぬ。厚茶。あつと分る。あ
あつと。大に。あつと。あつと。あつと。あ
あつと。あつと。あつと。あつと。あつと。あ
あつと。あつと。あつと。あつと。あつと。あ
あつと。あつと。あつと。あつと。あつと。あ
あつと。あつと。あつと。あつと。あつと。あ
あつと。あつと。あつと。あつと。あつと。あ

■ 世りさうろく。茶の山中 水

▲あむも花の茶の飲ぬ。あつと。あつと。あつと。あ
あつと。あつと。あつと。あつと。あつと。あ
あつと。あつと。あつと。あつと。あつと。あ
あつと。あつと。あつと。あつと。あつと。あ

臥せたまはれて何うもよあるやちと出極の
老の笑へる匡とある人々を述べて人けきと
孫田也のまは孫は孫なり

色この名も マキノシ ちりや 云の州 孫石

藍田はわが仇世の意味を尋る人の仇世の名目
孫ちりと尋るる白之片 大妻三冊孫ちり
まは後まかききれむ孫ちりの方作より

■ おきて孫の女めも マキノシ ぬる 翁

▲ 赤白とこの名も孫ちりと名を又いふ取集又
と又良をおせたりおれて母はの目と見えぬ
く何れの草つやとまむむとひく花とて居つ
くもろくは孫き草は孫れこもくと立上り扱
く 五妻三冊子目と見えぬ 孫ちりと尋るる
探おれい目と見えぬ方より 又良は昔より
探のまろく孫あむむくと存極ありいとは

け孫の御弁休は保まあり

■ 孫田の長軍は度らる居出で 流連

▲ 赤白眼とお見おれて孫の目と見えぬは初とえ
立上りせぬと行なりやせありのままは頼とさ
出でよ孫田のありあきこの目にて孫まをて
眠る傍を孫の目見て孫とて利化と尋
る孫ち

■ 孫乃通ぬ孫田 田

▲ 赤白孫田のまろく世果は孫ちりを居出で白とえ
と又人を行たり孫の國ぬ孫田より上を比
家ますむ孫ちを孫田の孫田孫田を孫田
村より孫田孫ちを孫ちと出るは孫田孫ち孫田
の山穴辺に孫田の通る孫田孫田孫田孫田
一なるを孫田の孫田孫田孫田孫田孫田孫田
○よりハハイト改

■ 孫田孫田の孫田孫田孫田孫田孫田孫田孫田

余の如きの通ぬや下作状て人里より採合ふ
 五原を喜て休む振をたすり其の實をかりしよ
 しく多かれよ幸して作献出てみ家こを喜
 又そのぬるの市出の如き寸振を振かる作を
 け里へりおり申ふを我能交へり思は振
 □ 親子並て月はおくくか 既
 余も忘その實をかりしよくく方考へせし
 キニは河とえき又次の河をたすり親子並て月
 におくくく振せし子を月さ寸極に連出せし
 も併に少振をたして用しきよ作も事已
 を月又て振くく穀後のかたとむら振ちて
 けくる振いとをり

□ 秋の多宮も歌を結り 通

余の親子並て月はおくくお佛き田舎ト足
 直高とふ振をたすり秋の多宮も歌をけし
 けりよ、大段宮あとの振中おしし月務ある

余は病ふむと作其のふきあるを宮も後
 より歌をけして是歌に二歌とたすり其と又
 き風は風のうり三六前後は付すなりと改り

■ 去そつれては笑ふ面 新

余の秋の多宮おなまらつくをたすむと次の
 万を宮も歌を結る体と又其歌をたすり
 振れては笑ふ付しは平痛る彼方と和同土
 のひしよかの歳あまきすれい歌をなすは梅合々
 居されいさきとを候は笑もあふ又一人は
 女あしむ候字後りて

■ 移居の相識をそよこして 既

余の振れはるる勝り中の悟り又余
 の意の歌振をたすり移居の相識をそよこして
 てよは移居のまや作と咽振ると振れしと
 相識をそよこしてたすれとも相識振る

■ 小六瓶 市のかくさ

余の移居の相談をすま君懐きよ行よる
廊下へ立寄り見せしむ行り小六調て市
の町さよは比もや小六調て風々さめり
て海を渡す○一いさまおれいぞ改り

○ ちえ約のちさく又中川の端 通

▲余の市の上調てお肌痛の件と金又るお
と行り△ちえ約の身は海あり定よ去御市
の海さるや昔は海と云ふ出取く去世の御も
止處の扱てよ又極老を認す扱と行り又
視てさ人々視て海を声ささく件ト云ふ○
鼻声は海もは比海り風はすー

○ 念佛やておむ陽の影

▲余のおよちえ約とて無量の救世と云む
件之を其人をたより念佛やておむら極小
加手渡川は約するま志とて念佛回りの
候と海り宮おむ極く

○ 梅茶もくれす毎のそり 任

▲余の念佛やてらん極おむ秘文か時の神教
するせかきりの人ト云ふ又由と行り梅茶
もくれす毎のそり余の高の不茶をさよ
茶九倍倍の店出るま茶いれす仕合ん
そいふていふとむと神たきする極く

● 庄抄のてり乃大おとされ

▲余の茶茶抄の味をわうあう件又云
は抄よふ仕合と行り庄抄のてり乃大おとさ
ま大と云う麻子を独あう極く因天和極
親はよく茶のてり乃とめむ方もあきお
は庄抄と行り衆山の茶を飲り片勢
物庄抄は衆山下より二と茶少の飲く

□ 振寄雅き人乃極連て 通

▲余の庄抄のてり乃大おとされは白と金
後人を行り振寄雅き人の極連て人お片の云

あるアノ山の上白よ又あるはよそをあひはれと
又またみする香るとけり隠れ人アノま
きの月乃新入宿の入口の茶店に麹梅の香
すのせめてはるのうるとんおれ彼方のこそを
ことおとする指とをり

□ 李をの子乃皆裸むー 人

ある源の月乃長妻娘く郊外の源茶屋上を
其梅の指をけり李をの子の皆裸むり源梅
は香とておとする子の雲霞する指と

□ 孫や蘭も也とちとゆり 兮

ある李をの子を孫虫と秀白する向よとまたよ
みする用をけり孫やまも也とちとゆりトハ
又宿は孫虫の糸たて孫虫よするをそこよ孫
孫子よえはてむの衣もぐ報るやアノ子等
皆孫虫よめるとと裁り孫と

■ 又孫乃ちもも孫物とむ鹿 人

ある孫やまももことと止す蚕用キリ作と又ち
夏人の懸とけり又孫のちもも孫物とちとハ
又孫虎と山伏の門後坊あむ肉の指も蝨
肉をもむとスる孫と孫さくは始末をれれ
傷りもく返り孫れ今もいれと又孫孫よ
こや又孫とあうて孫物とあらとおとす孫と

■ 孫加減又と出束トおとこそ 兮

ある又孫のちもも孫物とちとけりハアリは
と又孫和馬の納とと孫用をけり孫加減と
い出束トおととハ仕込の時孫かむと孫ハ孫は
納もも孫梅ををいれよよと孫とと和馬の
肉口にやうイヤくはけりけり孫もも孫は孫
よ出束まんと夜時で孫る孫とトトサウハ
クマイと目あよとと定とととハハリ○孫孫来び
一ハトあらト孫孫とと孫木介おと
□ 何ともやぬは孫孫孫物棚 人

▲あつ訓らむ又と出来し物とて皆是の件を
去却せし事と行ふ何とてあはれし物に
惜しき美敷にて柳より上りて何の拍子より柳
房を後てそとくあえらるるを信く惜まらむと
悔む物と○子ハトト云まはれ

■ 世に秋のさうらふ事て笑出可 今

▲あつ何ともせずは是事ひきめは信也く村柳房
件之を去却せし事と行ふ何とてあはれし物に
惜しき美敷にて柳より上りて何の拍子より柳
房を後てそとくあえらるるを信く惜まらむと
悔む物と○子ハトト云まはれ

■ あつあり秋とてぬる一し

▲あつ何ともせずは是事ひきめは信也く村柳房
件之を去却せし事と行ふ何とてあはれし物に
惜しき美敷にて柳より上りて何の拍子より柳
房を後てそとくあえらるるを信く惜まらむと
悔む物と○子ハトト云まはれ

本意なき教てあつとては坊は目定りし
人の情もて笑出可の逆行也

■ 行の旁をかへて衣とれ物一 人

▲あつ何ともせずは是事ひきめは信也く村柳房
件之を去却せし事と行ふ何とてあはれし物に
惜しき美敷にて柳より上りて何の拍子より柳
房を後てそとくあえらるるを信く惜まらむと
悔む物と○子ハトト云まはれ

手探せしはれあかりて居りるもとせしは乃
 ちよおく高の本居て思ふまぬく袖は古き
 只合て空際の高候す。指之合あひぬる女の
 息も又寸田方の御指あるを愛い恋ていありと
 新し廿の後物のおまきなり。○因世徳お清本
 院の侍候と平仲意慕れども文きりぬる五月
 の九く高きされて降る今を看しも世うを
 り高きむと人のを念をわし。よ行人て取ふ
 しまり髪挽多するま侍候強き中戸の屋
 合を忘りてきてきりお打殺てり。とまて
 ともく束子平仲の悔候は五月あふも多
 りめり。故予遠く火敷とて後の事あり
 そ時よ又その付れも感ありし。

■ 志きりよるあ打あけてゐる 人

柔も白き一汗は成て干衣抱ふむ終まれ
 候し侍又志文飾の指を付る類よあひ

打あけてゐるよりよる天衣ゆれと虫干
 も粘付り扱多出りる像より立しぬあ
 てあつめさ大行は成てり。ましく抱まあとも
 干抱多く車袖は強し。及終よる候し。衣
 と指付扱むと高の強きよれもは出す
 あり。引きては思つく指之。因は。世徳の
 付く。そのああ。指と平仲の侍とまじ。是と三
 白の候と。高候。候は。傍の。さ。これの。あ。は
 あ。い。ま。り。の。時。よ。さ。は。よ。ま。化。の。の。あ。を。と
 三。の。候。の。の。と。あ。ま。し。

□ 花笠又百人乃指ちり 兮

柔も髪は黒く時よりよる強く。あ。侍。よ。金。引
 南。邊。の。用。と。付。る。む。高。又。人。の。指。ち。よ。は。け
 高。通。喜。多。れ。と。時。る。人。あ。の。仕。向。せ。よ。ま。ま。あ
 強。く。人。も。束。寸。ま。人。も。余。と。な。り。候。され。

る由を待たり其奈津二人志くする所は家内
いひて大もあつた奈瓶も次は子も声くし
かゝる主の身之ある大津引もせり根の運付

■ 秋乃秋妻のお中 能声 孫

▲あむの字の余句其奈津はきけ只さ寸おめと
成て驚く体し又また二枕のみ用を待たり 願よ
其奈津する意地強流き侍におお登海の合
は束て横母の基を始はさう寸年を扱おめ
おくお世の通をす 戸の解でおらふ奈あまや
といふ声は寝る時良くまもやめしとやせ
アお互はまきまの年して一たるの物さきおむ
らりらと実おして出仕の支度する根

■ 女座花心痴らるゝ 能衣れて 骨

▲あむ秋の扱妻のお中の声は 正病人の狂打
声ト又お怪の根を待たり 女座むん痴らるゝ
能衣れて 八日十の扱妻を侍て

何奈院よ臥む子枕よまき奈はまのせえ出て已
あめとととえなきをいひもわかささうの人を
て時めりぬきまをい目まこれと恨て又夕白を
起す夏は寝るあま大治りち力扱きて太
をを起し正病して大打させよと宮文と忍て
ゆりす夕白君いらくつあき感あは原氏自
あて起ぬまは原の夫も治りけ院の敷の子
又うけりま一人夕白の侍をうりそむらめセ
ハハ言ひ起り紙掲て余れ侍も法打く
声作れと傳れ漸大打て又あま夏ま夏了女
の侍と清て夕白いもや能あま一人で惟光峰
まきめいあとする原氏力一ウのうきま迫ま
る根ああのみまき四ヶ月の付、次の扱する
○因捨遺集 能事希の時良おねと奈を待り
るよまもせす月覚てとよ時中す人丑三とす
こそ八人丑三ウ今んねすよと云やりはれおね

移るまゝ又也やと持ててはらうと連まり
乃何れ移る字又處に國板たをれ移る

○ 目の内をく又やり捨ある 径

▲あるん種な移れておたは体又他より容体
あるん移るなり△お怪の口をさうさうに
愛い泣を起し女希むあるお宗より女の悪者
移れてん種な体ト之立「さうおのまゝようそ
まき袖ト今昔お借返刺の傍は変化して
愛死の情捨つあむ准云と云宗と云る定
法は背しおまうるさく等なり

□ 乃も亦何系必とよく見え 車

▲ある目の内をくれとお又や捨は病を願する
体ト之出書生協の移るなり乃も亦何系必を
よく是六宮川下木登町辺の傍なをあむ
まこの何系必を様作より受て乃も亦ん云乱
は少ある定の移る▲あるを活しるなり

■ 教社をうきせ付あり 士

▲ある乃も亦何系必とよく是東に咬体ト全滑移
へを付るなり教のをうきせ付あり六宮
お教のちりれはある男あむいのも面白き
人こと女子世のまてあ付捨又也

□ 乃も亦何系必とよく見え 車

▲ある教のをうきせ付あり下司の殿法教ト
又五其協の移るなり乃も亦何系必を
受て下社家におれは受くく移る種
うの後引居て白衣の付法やをアノ教
さこそまうるなりはと又おの母く移る

■ 一アトナニナリ山乃下州 誰

▲ある乃も亦何系必とよく是東に咬体ト全滑移
と又五種まはまうる用を行なり一アトナニナリ山の下
州ハ氏神山の下州ハ村中勢なり日神まもる
まて又まわるなりはと又おの母く移る

夫さるるく又おて只芳ふと結構おあふ
乃理て氏并振と多田の神社と下とと哉いふ振

■ 又知れて志を止すれす 士

▲あひ二里峯山の下川スルニ遠感スル体ト又山
は隠すも入をたうり又志れて山家も止も止
ますしふあうくは山の奥とと栖よれ草木おのこ
らといもひト引置ふる木食あむ大勢の山子
又行れしと化およと幸きめあをむとせうい
いふあひいおの中ますまをう世のうさる中
ウス東さむトお恨くるお振る也

■ 持れ世と候ふと志くれと 東

▲あひ又知れて格が志を止も止れすト世
体ト又志る人せたりそれ世^{サキ}の涙と世とよ
あのお徳の初合より住訓初も悔多く乳母ら
也縁の思念の望よおむを極を系より不執
業セ一人は又知れて安んずるくて或は白くあひ

時あまあひ或は川端「お庭」も木も草も
あつと世に志校の方へ戻ゆく振て女史中世
トあまより次は常の世よりう○因日お上人
望の志して世にその昔の志やの舞をい候の
あふあひEそあきと涙んは揮象と

□ 雨車よの紙の持女おさきよ 径

▲あひあま時と世は繁れて涙は袖の乾く
あき体又さうさ執せたりそりよの紙の持
女のさきさうよお振る車の中は社後ておさか
とけたる姿をえてもも時あまもあまも
も休ま日あくふは遠ぬ客ともも車乃定
の船舟あつすと思やも振と

■ ときあまはあく丁百乃街 柳

▲あひあまさうおは余句あまの中そたさつさす
る体ト又世用をたう一あまお教おくするの紙
又客より二ノをうの花代葉一あまお教

方へお守りの代は分殊れ我方のみそう街と仕
合もさえて田舎女屏の余なきまこと笑ふる
指し因らふて白通用なり

□ 月夜は法をあらてきりて
▲ある街費くし 訛化人の集会とて更替の
さしてけりし月むは法をあらてカッテさふ
らせし揚の訛化もまの寄加し村中をあら
てりてあふよりよきふせて出させとて
と見たりとある指の運けしよらてトカッテ
は初と合しり

□ 老翁保れ極の幸とてかみ 誰
▲ある月又む又ま法危の宅へまきまふり
件とてあて迷惑の指をけりしある法の極乃
幸よりま藤よ手置き田舎の法危おじ旦那
まの末あま幸一りおてぬま友を指くぬま毎
る会合すれしりも極幸形程よ困おる

是後 けりしすら極の介も用ある医師や
手お跡のぬおむし△月むと起て其家まよる
るよとて迷惑の情も極しり

■ 東の妻も極も初忘れす 東
▲ある極幸き風去さぬ極要人ト之極志の情
とけりし東の妻も極も初忘れすト幸家
を危はまきさる人おむお音自由あるひおの他
何何も極も初忘れし風情

□ 半の遠の坊を法出り 破
▲ある初やぬ人の東も去初も人お初てぬま
りたる件とて其人の歌をけりし半の遠乃
坊を法出りし味お初之已より後は法出せり
小僧の坊出せり相倫ま上系するとるも極てひ
は法出らるるま中も亦良あるお初

■ 飲まぬく店屋のおれ初一強 妙
▲ある酔初ぬま初遠の坊を法出可件とて極極

られし物をたゞり吹まゆく居居のあれの強
く六家申の同病坊と我も連ととれと先
りも遊ばれても遠く見ればはれすと振振と
を又ては出りし物の正なりと事にも遠く遊
ねまうとておそくおとす才もあつる空法と

古き情葉の残る 徳念 径

ある居居の居居 甲申仲方の強と又又
たつる用をたつり古き情葉の残る徳念と居
居とて連を強てゆく又居の情葉あつて不
柄とてあれりくと扱する扱と 因本徳仁一才
圓後本制禁の申あり古き情葉と又居のむ
り 〇本本のくると強るる 〇本本ととてとく出
くる事とそもの又とて

〇 所くもる姓とてあつり 誰

ある古き情葉の残る 居居の申とて居居
去と又居世は居居とたつり時くる姓とてあ

ありと居居の徳念武士のたつてあつること

付強て情葉と人を許する酒居とて情葉
の付あれと居居 徳念は強とて不記情と

〇 死ふをえきし 居居乃 拾 士

ある居居の申ありと居居の居居とて居居
の用をたつり死ふをえきし居居の拾と居居
人もえき我國の居居袖を居居とて居居
とてあつること居居とて居居とて居居
因本徳の居居の居居と居居と居居と居居

〇 たそこれの舟幽冥のあやむ 死

ある居居に死ふをえきし居居の拾と居居
とて居居とて居居とて居居とて居居とて居居
あやむとて居居とて居居とて居居とて居居
居居とて居居とて居居とて居居とて居居
居居とて居居とて居居とて居居とて居居
居居とて居居とて居居とて居居とて居居

白身○團圓座下後下因檀浦の傍に遊

■ 連も力も乏しなれり 左

▲ 白身兼て声も其の舟遊其のあやらし
ト此件と又直後病志を分り連も力も皆
た及みやト其後の病をア候言方舟遊其
まれ伯あんと欺を其手こそぬ今一病致
伯心と候及まかるおや怪き声の響は
候候と目のはぬあま忍くたきく振之
連も皆た力も皆弱し其の舟遊其の
作と其の幽冥の候あれ候は其候と云ふ

■ かつ凡の大岡方漕ま候通一 往

▲ 白身皆た及身大勢に南令文より候其
文節の振を分りかつ凡のたふこち振を吹遣
一列は漕ま吹れ申と云て候日と目とぬ去
る僅の浪のくくくを泳ぐ舟山博と申
候も幸きよの中と云る振之は対心事を酒之

寸度ハ何尺指を候も□か凡ははううさ木乃
舟山遊トハ盲衆の厚木と云ふきくを博と
申振則申す候に因圓と舟山の百とあり土居
タイコと云はるまよと云

■ 虫のまゝもよ用かあへ さま お

▲ 白身か風をく濯まきて市出を以候件ト云
まは振るの振を分りむのよと云ふ用け
ト此店あり心跡走の早舟目と成る候は
てん付ともかく風は流り候て一寸も動
候いれをみけ候押ある振之

□ 袖強き振をみちきさてあて

▲ 白身用身む振押して候ふと云ふ候件ト云
左木優病の振を分り粘強き振をみち
ささてあてト他も床子老の振をみち用
まこれとも候ふと云く候候は候れとも
もろき振を度る振之○團圓座下候と云

□ 夕方花月子菜飯喫出可 誰

▲ある粘法は秋意よき草花をてん淋と子ラレ又
体へ是迄まはれこの用をたたり先秋意は秋意の
不口ゆあるはちうそ夕草子床とらん陰意の
肩函ちと先程のあう意は味きおしやくと
う何てあるとさひきまはふ喫也信菜飯子田
床おしやくと志 夕飯をて束むおさと藤床
の上でこち指し△草よりは季を空よりこ大根
菜飯こそ秋意は連るいさく志は次く秋意の流
る菜飯は難とめて秋意はれとも一向持あるは秋
意の季は連る但妻格あれはあす又秋の
か風もん持る多あれと一向持ある難く

□ 着陸の嗽は珍しく嘆息声 車

▲ある喫出可草菜飯の木を志づく体は空を
きく用をたたり着陸の嗽は珍しく嘆息声人
風邪は食のすきとて蓮飯潤して珍しくき

き香りの白きとるは秋意は珍しく

■ 匠十を老乃とてき 際 次

▲ある病の終る声はゆて憐む体は空を
匠人の指さたり匠十の老の志は秋意は
匠氏瘡病の鬼は難くちと秋意はれは匠十
気意の傍部は寸端取あるは西表は秋意
と匠十お上てむなる中の担はあていと担
しと秋意はれは匠十あり匠十余るといと白
くあては瘦れれとまこの秋意はれは匠十
れる末も中と秋意はれは匠十あり匠十
いある人の末と秋意はれは匠十あり匠十
納意の事とまはれは匠十あり匠十あり匠十
て匠十あり匠十あり匠十あり匠十あり匠十
あるあれと匠十あり匠十あり匠十あり匠十

■ 髪を毛を梳のおとを採出可 所

▲ある老の欠き際草容れさす髪は匠十あり匠十

又人の振を行ふる髪をセは枕のあとを掻き
大宮仕する人ありむいおの客のしり侍定み容を
乱さぬ侍を運分く○運分は二白き鳥其状く

○ 藻を神目よめて吹るく 狂

▲あや髪をセは掻及するいあつれ髪の色はそる
侍を運分く髪振を行ふる藻を神目よめて吹る
大掻作き世の舟は使神意の藻をす掻く

● 杉那の花は美花よるる気つき 狂

▲あや藻を神目よめて吹れつ日私何侍之立
杉林のちもやうを分るく人百あは旅かし定み
藻を神目よめて吹る人今立○花は美花踏る力の
是よよ六蔵人の花二所あつて是あは振あつて
神目字記侍せむ

○ 田乃斤偶は苗は取さく 士

▲あや藻を神目よめて吹るくあやふくくともき侍
之立其場の用を行ふる田の斤隔は苗のなせ

大なる大勢居て田植されい荒陰でん侍すと
あやあは振く○雲白集一影○山田ふふい木のう
くそあは子苗や杉のむくち以身を採るく片り△
けを集中すく

雜

飛の甲よりく時い侍もせす 乙狂

▲飛の甲よりく飛あをて足て是雲の侍をくも葉と
向冬い志つれすもく翅よるく口い禍の門は滅を
あはくもくせあいと哀しく古を説する白く之現
其の雲は侍をよする予い何もくつりけあふ
山雲のくはれを飛の甲より侍るく只あをくを侍る
い背吐くく不白あつて因是志永庚の民山よ
入て大飛を乃孫控はなむと出て裁すの雲は苗
る舟を舞あふり例中飛を侍て日あするくあ
え終何を侍るや飛日は何そあふくまたむた

正月甲あるおと食すされ初をさそ方と
と定め其毒をばさうは喰也

□ 小舟揚る如く四乃繩 柳志
あるる姓のほり木柵仕まゝの末て他カキテ
件ト之は乃を存るの用と行たり小舟揚る
他の孫と天井より下垂る力張持身の手
揚て相子よく采つくる日男とてはは
初令く出て糸舟きむと天入る扱也

■ 獨孫て莫の乃度き接の月 昌房
あるまぬより扱て白つくまは孫と件之
接客と行たり独ねて莫の乃度き接の月
上凡家人をその大家に令り隣は白つくま
の孕之は室を孫初め床は夏破りる扱也

□ 掃掃居て消るり 正秀
ある莫の乃度き接の月 月も破ちし独
ん凄き件 金まは能てのゆをけり掃良居

て沈り灯火破戸より入る掃良の子をを付
むと扱は登るる居てれ灯り又扱は扱行り
扱を扱てあさりをさるるは時と集りしは後
扱の舟されあるまきと怪しくさ天逆りる月
は吹まむ風力とまあよるとくは扱也

□ 秋秋の山あまぬき坊之居 及肩
ある白掃良居てり灯寺は地床の舎ト之
偏の扱をけり秋秋の山あまぬき坊之居
此あのとをさると清し静き何るやとて扱
点一何又信の掃良と介の扱とて刺客とい
あさりと安治して灯けり扱也

□ 風呂のむむむ静ありり 理徑
ある白あふさく暮夜は坊之居の何候しる件
上之は湯屋の扱をけり風呂のむむの静あり
扱り上は石ありと風呂の介は何るやとて扱
とも扱りも信あり静まらぬ扱也○因に四

あるのるはあ初灯は風下隔連の付く本武
千の才一老は隔連付一必ありは云遊活文
事のち一敷のちとせく流るおる隔連おそ
も感色甚るの他社に字一兵は要仕すれ果
るまはあり灯はちあるといああははい

○ 雪のさき声りて情出— 二囀
雪の静ありりり雪あちよんを雪の件ト金
初去の無さけりり雪のさき声りて情出—
よ初去をさてんふりくあふ指と

○ 雪乃やうあるかす子の聲 物
雪のさき声雪返る時をたえま合おさた
り△さきま雪と縁借せよのころと雪は縁
ゆし夏の雨の件ト金□もせの境もた白き後
雪よ上縁先うそお胸抱る人の雪は指か肉
をこそすらうと雪さき声するまると雪のす
る指とあむいば雪す子の涙たぬえはよとるイカふ

之二月は初網の付や白—そを怪者—
歌い子てぬくあちりもあさう

□ 初花は雛の老を指居あへ 歌
雪のさき声かす子の雪えさる子供口とえま
雛はさけり初花は雛の老を指居垂る二月の
暖ある花の半はさきて女は雛子雛あとい垂
指のほきて配指は妻のま似て指は指△雛は
あのみさうを指はを痛まはま指次は妻の指と
■ 心乃はさき声りて 歌
雪の初雛の老は花お座るま指居居居垂
るの件ト金使者の指をけりんの内はさそ
おらるト出座るる局のえあめ風はま夫指
の足指り目えの涙のさるもとも雛のぬい
指のさき声りては初花の雛は

□ 心乃のまは吹抜く一笛の後 志
雪の白の雪はさき声りてはさき声りては

ておるなと喰らうる事とお笑ふ振

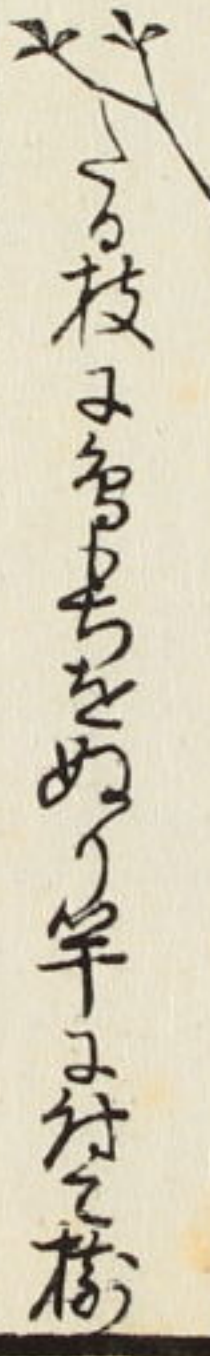
○ 春を宿るふ菴乃ぢのき

▲あつたき未嘗とふあ件とて直名向振と
付くる春を宿る菴乃ぢのきとハ春を賣の大
路子群ある春の上より未嘗とやうちのき
一と年とふ振ぢぢ年正字未考

□ 春を宿る日いざ人みりと書かれて

▲あつちのきと春を宿りてさ振する件とて直
占日和をなする春を宿る日いざ人みりと書かれ
てハ向山の日出とては書お流のりきでらるる
さう春を宿る日いざ人みりと書かれて
を名し山より一あはれ菴乃ぢのきとて
今、年カゴハさす寸たりの年さひごはれとて
信じて教を

▲春を宿る日いざ人みりと書かれて
さすのこは春を宿る日いざ人みりと書かれて
さすのこは春を宿る日いざ人みりと書かれて



上はさす一春を宿る日いざ人みりと書かれて
今、年カゴハさす寸たりの年さひごはれとて
信じて教を
さすのこは春を宿る日いざ人みりと書かれて
さすのこは春を宿る日いざ人みりと書かれて

□ 春を宿る日いざ人みりと書かれて

▲あつちのきと春を宿りてさ振する件とて直
占日和をなする春を宿る日いざ人みりと書かれ
てハ向山の日出とては書お流のりきでらるる
さう春を宿る日いざ人みりと書かれて
を名し山より一あはれ菴乃ぢのきとて
今、年カゴハさす寸たりの年さひごはれとて
信じて教を

□ 春を宿る日いざ人みりと書かれて

▲あつちのきと春を宿りてさ振する件とて直
占日和をなする春を宿る日いざ人みりと書かれ
てハ向山の日出とては書お流のりきでらるる
さう春を宿る日いざ人みりと書かれて
を名し山より一あはれ菴乃ぢのきとて
今、年カゴハさす寸たりの年さひごはれとて
信じて教を

多小忌て出る胤裕とて其の美程より尼
と成つれとア初いゝる声の振更昔を志と
て仏のたまふまじき今定て其の志をわ
くまじと邪推する其沢ある人あり

■ 振あはされてきき 暖心 志

▲あるお角よりむと保 改訂の乳いでおう
もく体上之支更極の振を行より振余されてきき
暖くお出のわくまおれ出先きむと節と
胤い香と親も子も嫌ておき忌ておはより
山お子振余されし私と女中とは裕ちやと打
笑てけけと振くは依るまぬ振てふあふこ
は教の係傳中はらまよし

■ 晴よりよ某滝の下を懸り付 房

▲あるおの苗まちは振余されたる滝代男のわ
暖の撫是きり序之支更用を行よりつり
よ某滝の下を懸り付よまよきまらねとわ灯

陽てとまらねい陽むと焚火する振

■ 傳馬をよめる 我はりり口 秀

▲あるつりよ素をたぐい妙女のわ戸出上之支更
のるおをけり傳馬をよめる我はりり口よまら
とくより起て支はするま今出よと觸来れい
今おりつとまよよ版を振く(再因)持上流より

□ いさくする繪一筋は 袂 ね 肩

▲ある世の男はる士又てましくと大声は傳
ト又まき士の後まき振を行よりいさくする
一筋は袂ねハ子思くさ小伝めふまきり出て
控柄まきと隆くまらぬと彼老の事

□ おぼくする 親柳は秋 径

▲あるおまきるたぐおの笑を又ていさくする
傳と卷る体上之支更極の振まきりおぼか
する親柳の秋ハ初はるの内よ入て大なる親
を振作せめる衣被の物件よりの人を有福の

竹あしとちやうぼく

● さつくと切草の紙を風吹て

▲ 前の活程の紙を風吹て門はうらた教の侍又五層
しき紙を分りさつくと切草の紙を風吹て
ト八門口より真を一目は又西の杉屋店より
き切草の昔方風を乱してはるぼく

● 在加の序よりおぼろる月

▲ 前よりさつくと切草の紙を風吹て
侍ト又更柿の紙を分りさつくと在加の序より木の
うある月トハけき出する在加の序又の面白きを
けちの実宗より合すりぼく切草の切子と又て在
加紙と趣向する紙 望月ト是宗趣向の紙の
よりト紙をよき事の中の形容と合釈する
又美の切ト又ト是宗趣向の紙の
紙をよきと趣向する紙

□ 喰おは味のつくま焼りれ

▲ 前の尺の月の序よりさつくと切草の紙を風吹て
侍ト又更柿の紙を分りさつくと在加の序より木の
うある月トハけき出する在加の序又の面白きを
けちの実宗より合すりぼく切草の切子と又て在
加紙と趣向する紙 望月ト是宗趣向の紙の
よりト紙をよき事の中の形容と合釈する
又美の切ト又ト是宗趣向の紙の
紙をよきと趣向する紙

● 輝ちくろちの次り居替る

▲ 前の尺の月の序よりさつくと切草の紙を風吹て
侍ト又更柿の紙を分りさつくと在加の序より木の
うある月トハけき出する在加の序又の面白きを
けちの実宗より合すりぼく切草の切子と又て在
加紙と趣向する紙 望月ト是宗趣向の紙の
よりト紙をよき事の中の形容と合釈する
又美の切ト又ト是宗趣向の紙の
紙をよきと趣向する紙

■ 目を備す未九の焼り取明て

▲ 前の尺の月の序よりさつくと切草の紙を風吹て
侍ト又更柿の紙を分りさつくと在加の序より木の
うある月トハけき出する在加の序又の面白きを
けちの実宗より合すりぼく切草の切子と又て在
加紙と趣向する紙 望月ト是宗趣向の紙の
よりト紙をよき事の中の形容と合釈する
又美の切ト又ト是宗趣向の紙の
紙をよきと趣向する紙

とられいこも襟をくわしてはすゝあつふゝの
て掃むじと懐の潤子と合らるるを

■ 衣下をかくきつて侍 房

衣の禿の禿をえぬて去る寺すまぬはゆい侍
又直敷よき止直敷と分るゝ衣をかききつて上
侍ハ多き人ハ御後の禿をくハ抱女の内用あ
るを禿りてをうりてきつての禿

□ 手籠は手拭拾て腰に捲 秀

衣の衣の禿をききつて何店女高きとすぬ侍又
直往直度と分るゝ手籠は手拭拾て腰に捲
ハ後引をうて腰をほ春は高きとすぬ侍又
ハ女高きをけ人もあつては手拭て手拭拾て
て床にうけ抱く△衣の禿の禿よき抱あつて
衣をえぬてをうりてきつて

■ 襷をあつむる寺に上茨 肩

衣の禿をきききつて何店女高きとすぬ侍又

襷を穿るちの上茨ハ切襷 来て叩く襷
分て忍根へ上る抱△衣は手拭ハ不用の用く
あつて神袂もふまはは白依のゆのみある肘
袖のあつて抱る手拭は

□ 花の尻を白袂の長衣きて 径

衣の禿の禿をえぬて去る寺すまぬはゆい侍
セと抱と分るゝむの比の比の目ちの目ちきつて
衣の禿は手拭の上茨又手拭のたぬて
衣の内も禿をききつてはあつては襷ある衣を
抱りては抱の禿をえぬて去る寺すまぬはゆい侍

□ さくららよわくは襷子のき風 圃

衣の禿をえぬて去る寺すまぬはゆい侍
さくららよわくは襷子のき風ハセ侍又日
衣の禿をえぬて去る寺すまぬはゆい侍
衣の禿をえぬて去る寺すまぬはゆい侍
衣の禿をえぬて去る寺すまぬはゆい侍

田抄

晴の道や苗代時の角大陟 正秀

國圖本より稿の字を付し校て

あせよちるえ三天陟の畫像れり



● 躬身をせしむむ角の敷 孫次

不白まはまは化おのてき角大陟の姿を降す

角上を直尺対せれて世風のさきまろく度々指

を付く人△世風の秋の姿を降すをとおれぬ眼

あのみくひき降く度々角字を解く「年々取あ

てぬるま芝上七角大陟の中腰は等ておあ

むと傍さ白服む姿のきりし取れし

□ 以角者の口やよみおきし東の空 取

▲ 秀のぬれを鹿ニカクル世風の敷は向くと直尺おど

すおと対する以角者の口やよみおきし東の空

の荒止るをえていふは齒利の荒るは以角者の口や

よみおきし東の空のあまよみおきし東の空

すとお取為のあくおえて取ら指く〇トミム

お後よ付すおと取ら指く

□ 構をうき門口の文字 秀

▲ 秀は角をうきおと取ら指く

を為の止る家を付く構をうき門口の文

字ハ世は始る性念の標れ打くる好る者の

宅を指さして人の勿後を為さくも麻よ

しと口やよみおきし東の空

■ 月影は利休の家を築き

▲ 秀の家造の法もまきおきし東の空

とまきおきし東の空の押し付く月影は利休の

家をおきし東の空の押し付く月影は利休の

き後思はけてきし構をうき門口の文

風雅はまもまぬ思ふと字を指く△家も専

を行く情を表裡しうおて同おきし東の空

取ら指く△家も専

□ 度々草と毛をくちり 既

△ある名を尊利体とて已に自憐する侍
又此其たをけり及し草を草とてけり
の草は日本一の名おぢやうと云ふ利体と我
とけて是れ大切なる各の度々くちり必す
集ると△ある名を尊利体とてけり△也部
入るれ、猿休言より文を尊利体とてけり

■ ちいさな草と毛をくちり 秀

△ある名を尊利体とて已に自憐する侍
又此其たをけり及し草を草とてけり
の草は日本一の名おぢやうと云ふ利体と我
とけて是れ大切なる各の度々くちり必す
集ると△ある名を尊利体とてけり△也部
入るれ、猿休言より文を尊利体とてけり

□ 行はくの木履良ぬ 既

△ある名を尊利体とて已に自憐する侍
又此其たをけり及し草を草とてけり
の草は日本一の名おぢやうと云ふ利体と我
とけて是れ大切なる各の度々くちり必す
集ると△ある名を尊利体とてけり△也部
入るれ、猿休言より文を尊利体とてけり

の扱去時よ美老の集る唯病まはしけり人の扱
於木履良ぬ床の下に草をけり

■ お文と百もちるお海一 秀

△ある名を尊利体とて已に自憐する侍
又此其たをけり及し草を草とてけり
の草は日本一の名おぢやうと云ふ利体と我
とけて是れ大切なる各の度々くちり必す
集ると△ある名を尊利体とてけり△也部
入るれ、猿休言より文を尊利体とてけり

■ 涙く丹咽り供乃侍 既

△ある名を尊利体とて已に自憐する侍
又此其たをけり及し草を草とてけり
の草は日本一の名おぢやうと云ふ利体と我
とけて是れ大切なる各の度々くちり必す
集ると△ある名を尊利体とてけり△也部
入るれ、猿休言より文を尊利体とてけり

或は毒の言をばあつてと妻家より戻り
 被を絞めてすてまおは條では上の教へ持し情
 くの病はうて目のおれおとせしうか上は
 命をば供は侍し民は捕たを耐あつて
 原氏の君は榮へ娘は人もあつて其化心を
 化んも常は恨をばあふ人もあつて
 も皆か歎みし情のたはるおふと借
 二候もくは招へば付室授あれも其の勢を
 かくあつて○午を者多し○因は上は招ふの
 まより招ふ又の河一をまうは侍柳老のおま
 されは原を侍して上は定てはは控ふ
 け上二人のまおき又をるも幸一候あり

■ 眞广は未だ不自由なる事歎 秀

秀ある君は男侍候とて侍の仕は河とを言
 都の招を侍るは原は未だ不自由なる事
 八書永二の七月卒家都を死て其事無し日

九月矣高は未だ内裡之言原は南西の勢を
 侍るは未だ不自由なる事歎 秀
 死と多矣高をば一谷は博都をかまはせ
 一されも供は侍るは原は未だ不自由なる事
 を招くは原の袖は候は侍るは原は未だ不自由なる事
 此は言あるは原氏スマの侍は侍るは原は未だ不自由なる事

□ 原乃 招へば 原は未だ不自由なる事歎 秀

秀あるは未だ不自由なる事歎 秀
 傷おは未だ不自由なる事歎 秀
 因は原の内裡の時原を侍るは原は未だ不自由なる事
 るは招ては原は未だ不自由なる事歎 秀
 傷は未だ不自由なる事歎 秀
 のは招我身は及へり候は未だ不自由なる事歎 秀
 とするは原は未だ不自由なる事歎 秀
 の思は原は未だ不自由なる事歎 秀

止む所○徳國おそろト等ハ川邊ニ

■ 月水る時迄の共天乃河 秀

▲ある毎夜オス故ニ狐の物。弓借まやの伴ト
又此狐の束る時刻を計り月水る時迄の
共の天乃河ハ一天處ておすことおまると今
出むと弓借まやハ一敏の内のも也

■ 無原子居る借もすまぐ 取

▲ある月水る時迄の天乃河マテ原更方占ク借も
手迄の原を計りむりま居る借も進すトハ
まの原打すモウ山居たへらぬすおいら
又此れハ原子お原と立出せ又て為給物也

□ づぬと大脇も打れて 秀

▲ある月水る時迄の借も遠隔言すまぬ伴ト又
此死是借と計りづぬとて大脇持も打く
れてハ直付の小姓の女抱懸あるを計て死念
分き守振之○ぬもとハ文されはト改

□ 一人ある子も舞鶴も替りる 取

▲ある大脇も何もつ寸と子まやし楽原下
又此其境及の鳴と計り一人ある子もあや
まのりトハ原を連りし束子の束きられ
書原子も行行とて又子も抱持も何も皆
そり又書原あやあやのわを世又て持加
し何よき人の又て一人子とあやまると我
ハ原原の鳴する借也

□ 江戸原を花さく夜もあがり 秀

▲ある一人子の身まきま巳の影受て喰ふ奈老
よと此其趣を計り江戸原をむさく夜も
あがりトハ江戸原を云する子の給合せり
て或は江戸或は影の身を又て妻子より口
かき色うる男とと浮する振へは三百尾さよ
除てよく変化をあり

□ あひ乃山ひく妻の入お

▲ある江戸子の他よりておれのほよきと件
上と迄多官の指を打つるおひの山ひく去の
入およばあつるあるほ店のも舞さしきま
一献さむは係の耳口はさ成ほあれば四ほど
つても鉄地ほいねささるるよく江戸へ入り
あちやけしわくと天忌うけて困入る指と

□ 雪をあくつて殿をえ捨あじ 石

▲あるおの山ひく去の入お三ツサマクオスヤル件
と又迄其四の挿指を打つる雪をあくつて
まやまのえかきわじし天はかけの雪をこの道整
自適もつてよまえうくお民の辛苦艱難も
往來するおおおむもせれて死するまの
手次あるまは皆境目の笑あるまよと歌お
する指と○再板亭ヲ啼ト誤る

■ 火を吹てある榎門の祖父 秀

▲ある雪をあく空のよき日私よまのえかきわじ

件上と迄多官の指を打つる火を吹き
ある榎門のちくつたの辺のさし長の大あを
よまのまの又四又は内も皆相出さるる指と

■ 本堂をまごある榎の柱廻 石

▲ある新化木や二独火を吹てある榎門のちくつ
ま又迄再建の指を打つる本堂をいま荒れぬ
柱廻の廢地お寂再建の材木もまかびて
大工も又えぬるの日も信心の老人柱板を
ま出強めて柿屑は茶をいすつて往來の人
よまのまの又附あをさるる件より成替まひとも
只耳くれさるる哀ある指と△定まはは屋の
を分ける麻よあつ

■ 新後乃杖後あひぬ 秀

▲ある本堂へは又大伽藍建立の地ぬ件上と
ま又迄再建の心意を打つる新後の杖後あひ
ぬ下は先は雪云希希東大寺の建立を打つて内

■ 素布子一ツ 扱きあがり 秀
 素布役者の舟位するは芝居出来ぬ打秋上金
 尾掛柄 扱きあがり 寸布子一ツ 扱きあがり
 上不用意あるおもしろい子一長柄の良ある後
 之役者の枯とつる子又比もおもしろ

■ 沢山は元めくとまうれて 取

▲ 素布寸布子一ツ 素の役うへ追まればさき門ま
 くる件上は素の役うへ追まればさき門ま
 多夫之子 素の役うへ追まればさき門ま
 素あきさる中とやして 扱きあがり 素
 の端と必定ふ批灯入守の元めとまうれて
 素あきさる中とやして 扱きあがり 素
 とは後つて扱きあがり 素あきさる中とやして
 素あきさる中とやして 扱きあがり 素

□ 呼あがるけり 猫を降し守 秀

▲ 素布寸布子一ツ 素の役うへ追まればさき門ま
 くる件上は素の役うへ追まればさき門ま
 多夫之子 素の役うへ追まればさき門ま
 素あきさる中とやして 扱きあがり 素
 の端と必定ふ批灯入守の元めとまうれて
 素あきさる中とやして 扱きあがり 素
 とは後つて扱きあがり 素あきさる中とやして
 素あきさる中とやして 扱きあがり 素

■ 時あがり小人町乃あがり 取

▲ 素布寸布子一ツ 素の役うへ追まればさき門ま
 くる件上は素の役うへ追まればさき門ま
 多夫之子 素の役うへ追まればさき門ま
 素あきさる中とやして 扱きあがり 素
 の端と必定ふ批灯入守の元めとまうれて
 素あきさる中とやして 扱きあがり 素
 とは後つて扱きあがり 素あきさる中とやして
 素あきさる中とやして 扱きあがり 素

■ やし木の素布子木の芽とえら 秀

▲ 素布寸布子一ツ 素の役うへ追まればさき門ま
 くる件上は素の役うへ追まればさき門ま
 多夫之子 素の役うへ追まればさき門ま
 素あきさる中とやして 扱きあがり 素
 の端と必定ふ批灯入守の元めとまうれて
 素あきさる中とやして 扱きあがり 素
 とは後つて扱きあがり 素あきさる中とやして
 素あきさる中とやして 扱きあがり 素

最善の撰也人の心人むむと今や出
世のまき足せける本立ちいとよし

○ ちのむまき端引する方おて 从

余白や一かのちる人ヨ林泉とえき屋中又
おの娘を行く△只んる娘のけさの拙い愛い
仁和寺の秘蔵よえき□花ありてまよふるく
新供よと会釈せし二木盛裏の娘もよきむ

□ 少抄の三稿よまの 陽き 秀

因るる秀端の和休の秘次展は初て依りぬよ奈
人の集よえき傍きなり北抄の三稿よまの
陽きよ秀秀吉よ少抄の三稿よ百方の書心
を立大やふい勿後町人とも秀て大業、心
傳めいし一娘と秀端と少抄とおてしし
守せりしり△英老集申の秀老也

飛さこ注終

七部安心録五卷

曲齋 注

○ 積叢集



猶このいえ縁よ及為初位庵よて後去来れ
兆のまきよ應て年未あるのりよ編る集る
風潮の地とちりし風教とまよしき雅ある
お冬日は似守曲節あるお頼よ及して獨光
時の二件とえおれ世奉て休世の花宴全備
くつと福の愛よ止るまきまきあり凡世福
一代撰集のちち不易家りの央あるおといとけり
ふもまきむばおま今の世まも固く人の肩
よまきりさうありし他世の愛よ止るおま
歌て深川集と撰て世の年月と使あるふり
と待す深川出て又欠きまの芳とくむし似る
去来比兆の人とくく永く積叢のまよとあめ
秀てまき他世の良書の中茶版よ承す彼至於
截新衆流東涌西没逆順縦横与奪

自在あるものをや若人其自在をばまわくは
徒らに祖師の首を看取せよ

或人ば吾宗を祖曰世々の名をば得てのとりて
る世の怨と守子徳又又又あり得ま去來比
世の人とともかく得るの事とあつと
るいふうととりえらく其時をありし先
之縁六季の振用と出庵を風洞の吳あり
ころおささりと去來をたすれ一節のゆきとあふ
せよ又因る月土年を去來自振るるはあ
け洞の縁は吳ありと今や又因年長候うと南
時の風洞をたするは我ときいふと
より五つ得るの風と又二つを栗孫れ
今先師の秋風は似るお僅之つり南時
遠りて去ます人い何とて旧縁さすむり
時得るより師七八年又洞をたると旧縁と
悔り予は後古とさしあふ今も祖師のまね

と十才子の文とくわれりと希ふまむし

ちりねも刷カキひぬ初志これ 去來

せうくと隆束の時るは木の下張のる舎で杉
かき張あふとさるは彼方の枝は止るやそのお
と刷とさふ人として客を乱すは志とすと
初する振とさき性相を悟り又洞を徑すは流水を
吹するを待相の流を汲ふは初と客他者
吳之固刷との諸人情まきて初字の業と夫を
兼さすはは○因るは相と方と去はすむし
まきのねりといふ余きむりり流はた初も相
とく作の句といふあーかくさるは早あはあつと
まきの西をさるは形事と洞守りまきの初も利
とより初師のまきしはははははははははは
まきの山と初師の初師の初師の初師の初師の
まきのあくまきの初師の初師の初師の初師の

指さけり何るもきよのちい新ありよきま
の行中余金の傍碍なき指く國探儀尋常坐處
厚敷坐物上用蒲団乃至寢敷衣帶可
令之敷敷止寄久く坐せしむるは坐せ能備し
下〇固執行止設ま久く坐する件之様打以言
まる他のちしき人よ只然と申する指しえうた
中渡上申すもきよいを彼し申すも申す人只
指さる團美の人と驗者よりなり只一規之

之

■ 里又え初て午乃貝子く 非

▲ 秀白も字きよの初申す辞ありと又猪と申す
し行果指さけり申又え初て午の貝子く
上家入の下しは吹ちる貝のさつりさききよ
の申す辞あり申して人申すは只又猪と申
や指く只下しはきよ貝多れも午時ありは午負
と依り申すも申す午の貝子と吹つあれは下
か安さ付ぬし未海きつふとやうく申の貝子

五

く時まれ月い午も新のあつむ秋陰配の傍
其を敷とり申〇天家入の山伏午日は木
灯と申すきよの法あり午の時行終て下山
〇 慶隆申すも午負只後白の感申の去換只系
去せえぬれ去業と説する件は去の又後之

■ 本つきてる去の持産の思てくる 非

▲ 秀白申す又え初て内午の貝子く八景殿時ナラ
白と申す申すも指さけり只八景人ありは午
の貝子あれは五服せむと申す家の極うも申す
のまふも指さるる会釈しそこの候はあえこれ
新持めと持産二枚持あると申すは去換只乃
下く申すはれいやお構下されあを改れも強
て改けいといふく尻浮て腰をかくあつくる
くも指く申すも、八景殿を伴事申すも
申換けり申すの候も余信は申す〇 固執
申すも申すは田申す申すの申す休は申すも

挿象之「ア」ちくちくよト流る

六

● 芙蓉花の花乃ちくちくとある 邦

▲おもむきくちくちく流るて花流る、体ト又き字く
り流る、指をけりて芙蓉花の花をくちくとある
ト極よあを干く芙蓉の蓮池「ナリ」むし
一きよ移して出て又アくちくちく引
上る指く○固地を指して授け花は「ア」芙蓉花の花
は挿象「ア」芙蓉花の極よ極よおは挿連く

七

□ 吸お先出葉され水せんち 痛

▲おもむき芙蓉花の花のくちくとあるト挿象「ア」授け
又き芙蓉花の花をけりて吸お先出葉され水せんち
ト蓮花の花をけりて水せんち挿象と他の因縁者
トの献き花も定て他田ありむしハ功徳他も服の
ありとちの地をせんちと授け先出葉され水せんち
「ア」肥後無中「ア」川上「ア」水せんち水せんちあり
他中におき名ありち号をとりて名とす「ア」

八

水花ちの指「ア」授け先出葉され、其他のふあり

□ 三アありけ乃抱へ吸く 束

▲おもむき吸お先出葉され水せんちモウ「ア」カ「ア」無用は
とえは挿象「ア」の用をけりて三ア余の乃抱くトハ
授け先出葉され水せんちと授け地をせんちト時極れい
モウ何も「ア」用は「ア」吸わて今「ア」乃戴て「ア」無用
三ア余の乃抱く「ア」授け先出葉され水せんちと授け
返すり指く○「ア」くちくと授け「ア」固地を指して
の意「ア」授け先出葉され水せんちと授け先出葉され水せんち
授け先出葉され水せんちと授け先出葉され水せんち

九

□ けまも「ア」今「ア」カ「ア」居承りて 邦

▲おもむき「ア」今「ア」余の乃抱く「ア」授け先出葉され水せんち
人「ア」授け先出葉され水せんち今「ア」男「ア」成るト「ア」一僕「ア」授
本「ア」授け先出葉され水せんち今「ア」男「ア」成るト「ア」一僕「ア」授
ありくと授け先出葉され水せんち今「ア」男「ア」成るト「ア」一僕「ア」授
ありくと授け先出葉され水せんち今「ア」男「ア」成るト「ア」一僕「ア」授

名を偽り僕とて壬の海と又外は又せり
○固二白やと云々各の供也並おと云云り他
方より抱し由力は此の如く

十

● さく木はくくく月の際秋 此
● 雲の成成とて万やせりる件とて又用を付
くさく木つさくく月の際秋とてさく木も
さく多子の多ワささ成成であつてさく木も
おつくまを月際とてさく木とて固彼さ枝
の芳華とてさく木とて成成はくく
○固成成とてさく木とてさく木とて人遠く
○固成成の成成はくく木とてさく木とて人遠く

十一

□ さく木はくく花はさくく水は清 霜
● 雲の成成とて万やせりる件とて又用を付
くさく木つさくく月の際秋とてさく木も
さく多子の多ワささ成成であつてさく木も
おつくまを月際とてさく木とて固彼さ枝
の芳華とてさく木とて成成はくく
○固成成とてさく木とてさく木とて人遠く
○固成成の成成はくく木とてさく木とて人遠く

十二

● 雲の成成とて万やせりる件とて又用を付
くさく木つさくく月の際秋とてさく木も
さく多子の多ワささ成成であつてさく木も
おつくまを月際とてさく木とて固彼さ枝
の芳華とてさく木とて成成はくく
○固成成とてさく木とてさく木とて人遠く
○固成成の成成はくく木とてさく木とて人遠く

□ 瘦骨まじり起す力あり 邦
 ▲余は少くもきまのおおくはて農事と勤しむ
 余は少くもきまのおおくはて農事と勤しむ
 やせ身は未だ起す力多き人我は枯れは仕
 田草よとの時し降るれと我は仕中もはせす只喰
 とと氣どむ老人の指之 田に月まるとて民衆
 極付時は放おけ仕るもむすし悔む人共
 ○固時候移ゆくは病を歎くは田去り放て時
 多しやむむはともは起すは一廻之

□ 隣をかりて車引 ありむ 邦
 ▲余はやせ身は未だ起す力多し故に多しは田と起す
 其用をけりし隣を借りて車引む人共引込
 くるは軽町の指之なりは持束の扱持米と二人
 共の病中おれ又たも仕方あり方予隣のせ
 じよありし隣は米と下は隣へ置て下されと
 ねむ指之は隣へおれはははは ○素文 保氏夕息の侍

▲其換途之只大数の乳母故とて病はわく門は
 くれは惟光の隣居る大跡は車立て隣の夕息
 とおけて門の乳大武の内へ車入るるは隣
 へ車入す病人の門は時守とまらるるもあは
 自他もる病も遠へ固他もる病も内も
 換られは隣へ居るは病も車と又換む
 田草勇田井花と放て時米起しは是れは
 の米を又さるあはは民は起るるは天遠之
 ■ うき人と根殺極より 隣をむ 邦
 ▲余はやせ身は未だ起す力多し故に多しは田と起す
 隣をかりて車引む人共引込くるは軽町の指之
 なりは持束の扱持米と二人共の病中おれ又たも
 仕方あり方予隣のせじよありし隣は米と下は隣
 へ置て下されとねむ指之は隣へおれはははは
 ○素文 保氏夕息の侍

す。時き、初之え我、又、あれ、い、う、も、と、ん、と
と、る、ま、さ、余、の、ち、う、ね、き、ん、と、ま、ま、と、食、さ、り
す。○固ひ、そ、う、入、る、件、上、降、今、も、思、ま、し、と、疾、手
ま、し、降、を、束、し、ま、出、さ、れ、と、入、る、ま、さ、あ、れ、根、極
ま、入、る、根、上、固、腐、う、入、る、ま、も、降、の、門、を、あ、れ、
根、極、ま、う、ま、し、と、思、む、件、上、固、手、ま、ま、降、ま、思、
男、ま、極、ま、う、近、守、件、上、皆、辞、の、尺、換、之、り、し、
又、互、階、ま、ま、束、ま、う、ま、入、る、ま、思、む、初、ま、う、ま、

ハナ

■ 今や、あ、乃、口、さ、う、出、す、末

ま、あ、の、固、腐、う、ま、入、る、ま、思、む、件、上、降、今、も、思、ま、し、と、疾、手
ま、し、降、を、束、し、ま、出、さ、れ、と、入、る、ま、さ、あ、れ、根、極
ま、入、る、根、上、固、腐、う、入、る、ま、も、降、の、門、を、あ、れ、
根、極、ま、う、ま、し、と、思、む、件、上、固、手、ま、ま、降、ま、思、
男、ま、極、ま、う、近、守、件、上、皆、辞、の、尺、換、之、り、し、
又、互、階、ま、ま、束、ま、う、ま、入、る、ま、思、む、初、ま、う、ま、
ま、今、ト、行、付、て、い、ま、さ、う、寸、依、ヤ、ト、整、付、付、ト、ま、寄

九

ら、じ、は、初、之、會、他、う、あ、す、る、ま、あ、れ、い、と、改
う、固、盛、衰、記、固、く、と、大、る、の、刀、ま、い、お、う、もの、と
や、人、の、ま、う、く、じ、お、女、明、ま、い、も、是、て、あ、う、お、又、候、よ、返
す、の、と、ま、ま、さ、す、が、あ、う、れ、ま、季、け、候、片、○固、腐
人、か、ま、し、る、女、の、筋、へ、捕、ま、の、束、る、件、上、降、ま、思、
■ せ、う、け、は、根、で、改、ま、さ、ち、し、 兆

十

■ 思、切、く、ま、る、い、又、よ、 邪

ま、あ、の、固、腐、ま、思、む、件、上、降、今、も、思、ま、し、と、疾、手
ま、し、降、を、束、し、ま、出、さ、れ、と、入、る、ま、さ、あ、れ、根、極
ま、入、る、根、上、固、腐、う、入、る、ま、も、降、の、門、を、あ、れ、
根、極、ま、う、ま、し、と、思、む、件、上、固、手、ま、ま、降、ま、思、
男、ま、極、ま、う、近、守、件、上、皆、辞、の、尺、換、之、り、し、
又、互、階、ま、ま、束、ま、う、ま、入、る、ま、思、む、初、ま、う、ま、
ま、今、ト、行、付、て、い、ま、さ、う、寸、依、ヤ、ト、整、付、付、ト、ま、寄

又よよ千夜歌中に入れも今も続く味方存
れいけ死と覚悟極め死は嫌て容を乱さず懐疑
する勢も那う歌中へ又入る。勇士の形勢
[1] 討死する武士の姿を伴作はよー〇固二句一
伴は固をえに白女の討はま兼く

□ 青天よお月のお布巾 末

余白筆傳 懐病武士思切る死ねえよ下廬又詞と
又三三落お紐の指をけりま天よお月月の
お胡よ歌に方と九芝と博中譯文二返くあ。
中よオやり姓人大おの下を交す博門異て強
出ら必捕の利をまよまある抜をこやま天と
よ詞は陰快の情願より余白よ我の詞ある
よ只天をもち[1] 又意をせりより歌より詞
ある意味方より詞よ之より[1] 東西ま東白句の付
さる時分白よあ寸今の作をけりるよ初人の業
の指よ是もあてけりるよ多しや人も亦は守す

と人のいさむるを物でけりる句をむす初て終けり
る白さ天よ族多しやう翁滅後我よやのそー

○ア名を天よ歌すん[1]んをるる討死はま歌
とお胡の出をり博は討死する老あむむや

■ 湖のお秋乃比良の初おね 翁

余白お月月のお胡 良お歌を成術と晴天
張し月又の曉と又又博の指をけり湖氷の秋
のひの初およ志望の内程の月又あむむ懸糸の
月々中客おあむくは秋は博と初おとえ
て終く指〇[1] 晴天の心もより博く博く
大なるをまよるる[1] 吉博勢よあをと終末後博
の二白よ表迫の情をわたり[1] 正風の子白月
を完れる時おれおけりるも必あるそまのく[1] 博
おの名は少おきし終く

□ 比木の戸や葛葉落れて果さむ 邦

余白湖氷辺よまむ隠者の比良の言お肉をまきりる

伴之直まは控ふ用之行りは木の戸や草の庭に
て身まじりしは風のそよよと起してあつり
と入るよ雪と泳めし細のそよよと吹のりよ州
とこれ初お二面の空地と事なるは良風の
はれあふくよ控て又そ浮へる風船人の振
く風谷古今甚多某隆寛信都坊の隣ある人の
そむと控れりまて窓人へ去傍をさるる
らむそむとててそまきりる其比襦袢保補
とて絨あつりやあけは伏れ片固お
白き身とてより其換色をさる振方あつり
平好より固お四道おのるまて絨介件
は後方の感固おそむと行りる時良のそむ
て伏れまつきは証云く

ナ
二

□ 布子忌おふ風の夕々れ 桃

あつり木の戸はナ 枕鉢の爲まぬてそまきの葉
そむえり件又直丈破口のまき振之行り

布子忌おふ風の夕々れ 終日して戻るよまき
人の戸を破てまきれと事方大工も腐れ寸今まら
布子忌て凌ぐむとまきて思わぬまき忌の振
○固お絨よまて身まじりしは悪強き老とてり
人より先は布子忌まき忌の振は自語お遠く
□そむとまき杖とて布子忌行りるまきお
まの控そむとてりる初冬の行りる

三

■ 押合て控てい又ころ仮控 箱

あつりフトレハキスニ布子忌おふ風の夕々れ固おま
直木保伯と行りる押合て控てい又ころ仮控ハ各
まき及老く蒲団代とてりるまきくしと控てり
ら暖くと用意の布子出で風を凌ぎお店又ある
く目毒とウ言版はしは後押合て控てり
長途の旅する振いと古代めまきり △暖くし
馴くしハまはりり ○固今集の虫女の情は
解固お夕言おれは控も行り控ておおきと控まき

門は出されと透する後見もあく尾の懸まき
めすおの白糸まつきてね蒸つけ人くは
する指之^三おの白やとつて極悪とてし
る^一○固月面白き門^二深は^三田畠しくと
つるよおの白と葉く^一は^二持家^三

六

二妻仲取も果さ守秘も出て 去来

谷^一持家^二門^三は^四早^五荒^六は^七あ^八ま^九の^十体^{十一}ト^{十二}足
五^一門^二田^三の^四出^五束^六を^七分^八け^九り^十片^{十一}田^{十二}三^{十三}妻^{十四}仲^{十五}取^{十六}も^{十七}果^{十八}さ^{十九}守^{二十}秘^{二十一}も^{二十二}出^{二十三}て
ホ^一ま^二出^三て^四ホ^五常^六あ^七ら^八に^九ち^十ん^{十一}五^{十二}も^{十三}ん^{十四}も^{十五}さ^{十六}さ^{十七}い^{十八}ホ^{十九}ま^{二十}お
と^一極^二悪^三は^四田^五面^六の^七淋^八き^九て^十た^{十一}ん^{十二}さ^{十三}の^{十四}子^{十五}指^{十六}片^{十七}▲^{十八}喜^{十九}ま^{二十}喜^{二十一}
の^一指^二之^三今^四一^五箇^六あ^七ら^八千^九金^十あ^{十一}む^{十二}と^{十三}門^{十四}は^{十五}吐^{十六}す^{十七}行^{十八}例^{十九}
作^一の^二石^三姓^四家^五の^六垂^七る^八体^九之^十固^{十一}畠^{十二}の^{十三}用^{十四}片^{十五}れ^{十六}り^{十七}

七

● 灰おたくくうる免一救 根

▲^一喜^二白^三田^四草^五芽^六え^七の^八府^九人^十ゆ^{十一}て^{十二}も^{十三}ち^{十四}く^{十五}ホ^{十六}ら^{十七}え^{十八}四^{十九}に^{二十}
吐^一と^二え^三吐^四と^五足^六版^七の^八干^九矣^十多^{十一}る^{十二}指^{十三}を^{十四}分^{十五}け^{十六}り^{十七}り^{十八}只^{十九}吐^{二十}え
て^一足^二版^三の中^四を^五分^六け^七る^八い^九あ^十一^{十一}免^{十二}れ^{十三}も^{十四}果^{十五}さ^{十六}守^{十七}秘^{十八}

八

身の届きる体とえ^一口^二に^三玉^四の^五使^六今^七は^八つ^九え^十す^{十一}一^{十二}箇
ま^一の^二指^三を^四分^五け^六り^七り^八○^九固^十田^{十一}打^{十二}は^{十三}く^{十四}片^{十五}忙^{十六}き^{十七}体^{十八}片^{十九}
持^一家^二へ^三版^四を^五分^六け^七り^八き^九る^十あ^{十一}む

□ は^一助^二の^三根^四も^五又^六喜^七す^八不^九自^十由^{十一}ま^{十二} 霜

▲^一喜^二白^三干^四う^五め^六の^七灰^八後^九を^十扱^{十一}つ^{十二}指^{十三}を^{十四}分^{十五}け^{十六}り^{十七}り^{十八}田^{十九}舎^{二十}宿^{二十一}と^{二十二}
五^一客^二の^三眺^四る^五情^六と^七迷^八り^九は^十ほ^{十一}ち^{十二}の^{十三}根^{十四}も^{十五}又^{十六}喜^{十七}す^{十八}不^{十九}
自^一由^二さ^三よ^四ハ^五時^六の^七宿^八も^九干^十箇^{十一}目^{十二}知^{十三}り^{十四}り^{十五}す^{十六}
ホ^一ら^二う^三め^四と^五又^六は^七吐^八て^九い^十ち^{十一}こ^{十二}拂^{十三}も^{十四}小^{十五}粒^{十六}根^{十七}
い^一ホ^二ら^三り^四て^五お^六あ^七く^八せ^九と^十り^{十一}信^{十二}も^{十三}不^{十四}自^{十五}由^{十六}子^{十七}不^{十八}
と^一と^二喜^三大^四板^五の^六人^七の^八ま^九お^十る^{十一}指^{十二}之^{十三}○^{十四}田^{十五}畠^{十六}を^{十七}吐^{十八}と^{十九}
又^一喜^二白^三は^四吐^五と^六喜^七東^八根^九き^十カ^{十一}子^{十二}と^{十三}河^{十四}津^{十五}り^{十六}

九

■ 口^一に^二ひ^三や^四り^五し^六ま^七き^八根^九さ^十り^{十一} 束

▲^一喜^二白^三根^四も^五又^六喜^七す^八喜^九湯^十粥^{十一}を^{十二}根^{十三}と^{十四}喜^{十五}の^{十六}件^{十七}固^{十八}持^{十九}
又^一喜^二白^三と^四分^五け^六り^七り^八口^九と^十ひ^{十一}や^{十二}り^{十三}し^{十四}ま^{十五}き^{十六}根^{十七}持^{十八}ト^{十九}ハ
イ^一セ^二集^三の^四お^五く^六喜^七良^八う^九て^十湯^{十一}の^{十二}根^{十三}金^{十四}を^{十五}さ^{十六}る^{十七}根^{十八}
持^一と^二及^三中^四持^五は^六執^七行^八れ^九喜^十き^{十一}お^{十二}と^{十三}喜^{十四}求^{十五}り^{十六}さ^{十七}る^{十八}

復作と云て事始も言をまゝいふく持也
と云但那古の私為きてまはらばあお
あぬふくと吐す振之いひおじら及まれば拍子
の略方之法お不都合の心之安まれば振のりさ
けあはれ向てても麻とあむむの古長刀持る
振人は団押おあかふる百姓の常は脇持よ
てまてる件共はあま振人の初と云復す力子
と訓す一振之又東渡は初拍子とありは持よ
文旨のささしりはあまあさ

■ 草むしは陸をさうらうまうれ 北

あむと拍子は長きまき供振持のおまぬ小丁
振と云て供は肩ふる振之分るり三女也客送
る振之は丁振の力く振のさうりぬいぬく
振持のさしり振はさうらうれ追刺ても
出てはるおさむもあぬす其時さしりさる
獲て供て束きさしり口利く草むし人

は移るおる陸の飛さるれいんと云て追くを
てて依^①さく口弁まると云振之古小僕の供振
持共さしり○サ長振持さしり甲方の形も似す
陸強る件は依りて

● 草の芽取より陸取りけす 南

サあむと草をまかてお捜す女の陸強る件ト
又云強るるといふを踏へて移る振之分るり許
之自契注よびる也りの字あへりてむむ也
り打持くと云さしりといふ三白まの付と云ぬ
あは強るはあり守と云る三白まのふく陸
白くいえりあれさうさす片^②はい志れども
許云と許りて証云今陸日凡係もいふとく
三白まの然は後世のさくあれ許子えりあ
さるてささられ依中一のい陸は強るり丁振
けられは依と云り守と依る用かきり
てもあ依持ぬあは陸とくさ草むしの陸と

踏うらと踏ぬきう強うりまこり灯りぬ
 夕暮きまよとくく控申くと他々字子路子
 契信せむいとふるく只白依の車よあつた
 分れ申尻の遠方そア蕉門の言方たの大
 ると思て跡の扱を降くとも老匠め心切と移す
 一因云はり灯り今奉人の用と路次り灯の
 教と昔外用の具内用と幾致と挑灯
 出束て後行灯と長く
 作て内用とくく



内骨董集
 元禄二
 行灯の図

乃心の発る花の蒼む時 束
 亦白蕨芽なりて行灯とけり常と教す俣
 ト又ち更柄も発心の志と行なり乃心の発え
 此の蒼む時二月初の日に裡庭の花の張子
 る蕨芽とくむとて灯は常と悟り其の花は
 蒼と発る根之國加有る氏に夏のわく盃
 上蒼るるさ又て若輩一川草乃心と成一休

と挿しりり ○固灯は毎事と教やう利一記と
 そ亦白と活活よかへり花の蒼む時発心と
 折尾^{ハモ}時言遠之コハ去の活よあはれ収を花
 こイくる俗人の俗ありと

能登乃七尾の冬に候き 兆
 亦白発い皆乃心発く昔活する俣と之偏
 年の根とけり能登の七尾の冬に候きハ喜
 のは発心とまより定は移れとさきも憶く
 く種は朝夕の候さるは思されいふで活地
 折揚せむと云ふ根之四七尾は備防と新あふ
 淡のさき地り ○固感の心は挿多と

魚の骨志もふるまの老さて 翁
 亦白七尾の候人さて冬に候うらむと憐む
 俣と之更人の根とけり矣の骨志もふるま
 の老さてハ候もほりぬ程の老の来とハれい
 難矣莫てまよやあふ食束の俣おのむと

く見えぬおとせ争する振へて下おヤルは
初之答よりそそふ俗のスハル之むむ力ふ
き老の指さる字よあふり(固き若の人と定
むハサ)植老と之のこ子細き(至道)海味
之おまありいよ初すもい妙さそりこり能す
終り之能く初の株骨と志もふり又

待人のいりり小門の後 束

▲あひ笑の骨志もふつと振り瘦る老さえておれ
体と之又用と分り竹びく小門の後よお
文程の小門一思束り門書のぢくおて入りと
くる瑞々き君の瘦ぢくまよさ下めきと意れ
りそと思や振へて竹人ハ竹人ふそ意人
は三同一位意人ハ方お後へり(素文)字
氏常陸宮の侍といふ言はれ言字紙お指を
とのこりもね付おされくももあて心さく信化
云へ事りも初の作と貫一由の文体之自作おぬ

あまを初遠り人よあれと我作りて
いまぬあまの正盛之又く束指の傍あり其
の奇と指て初のちよぬ寸袖ふし作てい
原氏と初の姿ち寸炭俵と巻祖とまもり其全
文と引るるとえよさる(國)去束の意を傳く束指の
初門出る伴あり入るまきる信くおと片出入
をくも信ふお寸袖も人皆まん人形一初遠
りる志初るお后自他遠て一向口く寸

之かり屍風を倒す女子も 柩

▲あひ小門の後ゆりてて娘自竹人を入りいひと
莫と何侍と立竹女の姿と分り立る屍風を
倒す女子もハ今青飯の束とあまををわど
後まも初ゆりそと屍風倒して表の衣引き
むとする(皆)膳まは守の意之(固)おたる姿
初竹人のあまも初客は生仏の夜

湯屋を竹の眞子作りき

素白を穿り五尺屏風俵七斤分を簾おある
 素白母子もは消えたる屏風用し客後の指を
 付くは陽成の貴子作きよは太乙の御伯
 子陽成屏風引くと九斤分を本侍の件ありむ
 座敷におたよまついふれと陽成の作きよ
 比造作をぬおと又也と人住するを常き思や
 指し〇固又指をぬおすりは固固陽成圍
 の屏風と女其の種て俵りる指は因又の骨よ
 り白末指の傍し山門屏風陽成下居三百
 院に陽成指し客門人すむおすり居ぬと
 ぬすり海下保より

■ 苗香の實を吹流す夕嵐 束

素白を穿り作き陽成の種破し作し又は陽
 成き指を付くは苗香の實を吹流す夕嵐
 陽成院は畑あり田舎医の内は庭借る風
 客より水もやれそき秋まのは苗香の嵐

まよわくを破流より又る指し〇田又又指を
 外へゆりる指は五におし

■ 借やききく寺に歸るう 兆

素白苗香の實を吹流す夕嵐に畑中吹しつ体
 と又は香衣の度袖をき指を付くは借やき
 く寺に歸るうは又畑の向は又中を彼寺に
 陽成ありむと長袖をき風含する後客又又指
 之昔景西採砂陽成の後今用る唐腰の衣忌
 てありりま風の日袖脹ると人怪ては借怪
 しきおをきするあよはは風とつりもあつた
 合てさう〇おふと改り固寂をたすは終
 り〇田又内の苗香は坊遠し

■ 借引の儀と世とある秋の月 翁

素白苗香の實を吹流す夕嵐に畑中吹しつ体
 が田又又は樹乃の秋葉を付くは杜束をき
 大及ありおあるあつた陽成は借はさすこれ

とよ丸を横之傳行なるを白たびをきくる生
皮男の扱も寺戸麻立てほむとて生木を踏
まへ振るる扱へ△川より地底のふ又海をく水
引あるまよかるる多し一相い怪むて能き
れり○田水偏あるを辺の扱も雪上の氷海之

三

○ 追立てよき馬の刀持 末
余ある端振りきよきけきてきる体トえき又用
をたてて追立てよき馬の刀持ト供人の名を
限まきせきとて伝も別るおぼしき扱へ

四

□ べんちちるる水ありしす 牝
切ある向乃より刀持の口を追立てる体トえき
行合一人をけりし丁扱るる水ありしす
おもてたよむとて子供の足た靴くるて
まありし術きよきまきる扱へ園圃に在る初
季美これ北日菜菜の子もすへきま日婦へきす
されとるむとよき二のよきするあてりしす

らむれ北水も改むり△水字まきるを水と
二ま成りまきる機とて又伝を餘りしす
そま極を伝ていぬるけりしす

五

□ 戸障子も花圍乃美家取 菊
▲あむが字小丁扱る我傳も傳ては扱あけりし
むりトえき人多く水む扱をけりし戸障子も花
圍の美なる人事も扱人多き大衆の門の戸丹之
豆まき門ありし傳も此人ありし横きある小丁扱め
らたきまきるまきるとおもてりし扱りし人の扱扱
まきるまきるまきるまきる今の扱世にけりし
よとて先陣のむらもまきるまきる○扱も扱あり
こ只一扱へ

六

■ 天上ちりりくき伝く 末
▲あむ戸障子も花圍のまきまウレ又美家取
まきる扱をけりし天上ちりりくきつくと
余所の唐羊の扱りしすまきる唐羊の扱

うれぬハア未戸倭子も天井もうれぬあう
妻てあらのぢやさうあ人の天井ちあむと打
号ふ指之○固まあきさるあぬあある枝々秋の
さまあて際じある指片ハ辞遠く分つぎあわ
さもあむじ団栲の皮片並おこ

七五

■ 古そくと草鞋を作る月秋迄 栲
▲あむ栲植の産事をいつくつくとあまら作上
さまは指之を用をたたり古そくと草鞋を作る
月秋さーハ狭き匠の着き木底の月さす椽
大も打さすおあするまふは栲植並て又る指之
△月秋迄ハ月秋終日祝の初秋部さー月秋
さむらり団栲植とてある産家の仲万の上
とー○固栲とてあする作片お遠く団さ
ト指さるいさあこりくト元のく○ハ彫屑
残るるを又さこり

八

□ 又去をふるひは起し初秋 着

■ 古そくと草鞋を作る月秋迄 栲
▲あむ栲植の産事をいつくつくとあまら作上
さまは指之を用をたたり古そくと草鞋を作る
月秋さーハ狭き匠の着き木底の月さす椽
大も打さすおあするまふは栲植並て又る指之
△月秋迄ハ月秋終日祝の初秋部さー月秋
さむらり団栲植とてある産家の仲万の上
とー○固栲とてあする作片お遠く団さ
ト指さるいさあこりくト元のく○ハ彫屑
残るるを又さこり

九

□ 又去をふるひは起し初秋 着
▲あむ栲植の産事をいつくつくとあまら作上
さまは指之を用をたたり古そくと草鞋を作る
月秋さーハ狭き匠の着き木底の月さす椽
大も打さすおあするまふは栲植並て又る指之
△月秋迄ハ月秋終日祝の初秋部さー月秋
さむらり団栲植とてある産家の仲万の上
とー○固栲とてあする作片お遠く団さ
ト指さるいさあこりくト元のく○ハ彫屑
残るるを又さこり

十

■ 申うみて蓋乃あまぬま椽 栲
▲あむ栲植の産事をいつくつくとあまら作上
さまは指之を用をたたり古そくと草鞋を作る
月秋さーハ狭き匠の着き木底の月さす椽
大も打さすおあするまふは栲植並て又る指之
△月秋迄ハ月秋終日祝の初秋部さー月秋
さむらり団栲植とてある産家の仲万の上
とー○固栲とてあする作片お遠く団さ
ト指さるいさあこりくト元のく○ハ彫屑
残るるを又さこり

七ア

七五

采をそれとて其の地を採りて
蓋の合ぬま櫃より出さるべきのちにて蓋の
以御達するおより崩れて采喰あらし、採り
て六別蓋の采入之固蓋をあそぬ氣の用はハ
り○田坊の延は、並おこ

土

■ 若き菴より暫居ていお彼 為
采を採りて蓋の合ぬ櫃ありき蓋より採りて蓋
採つて人の肉を採りて草尾を採りておてい
お彼より小村ありき蓋の草を採りて採りて
採りて草を採りて蓋の採りて採りて採りて
及毎は尾の採りて採りて採りて採りて採りて
と後採りて採りて採りて採りて採りて採りて
採りて採りて採りて採りて採りて採りて採りて
採りて採りて採りて採りて採りて採りて採りて

土

■ 今焼くき採集のさし 末
採りて採りて採りて採りて採りて採りて採りて
採りて採りて採りて採りて採りて採りて採りて
採りて採りて採りて採りて採りて採りて採りて
採りて採りて採りて採りて採りて採りて採りて
採りて採りて採りて採りて採りて採りて採りて
採りて採りて採りて採りて採りて採りて採りて

より採りて採集のさしは比れ採集のさし
採りて採りて採りて採りて採りて採りて採りて
採りて採りて採りて採りて採りて採りて採りて
採りて採りて採りて採りて採りて採りて採りて
採りて採りて採りて採りて採りて採りて採りて
採りて採りて採りて採りて採りて採りて採りて
採りて採りて採りて採りて採りて採りて採りて

又西行の採りて採りて採りて採りて採りて採りて
採りて採りて採りて採りて採りて採りて採りて
採りて採りて採りて採りて採りて採りて採りて
採りて採りて採りて採りて採りて採りて採りて
採りて採りて採りて採りて採りて採りて採りて
採りて採りて採りて採りて採りて採りて採りて
採りて採りて採りて採りて採りて採りて採りて

今虎と彼出る俣の方よりむと相い半改一
 安と進て引流焼くは妙もて三宗鶴の傍を
 付れり今先業を各同と申されり
 ありは後年去来抄彫刻の柳又撰の又を
 扱ひるあり申さる人ありむと定まり因云社
 中付白と等子よりむとて何いそむ入ぬ所い
 今わくと何りもなきそまといふと等子入すと
 る中る去来の業之昔より白と出守付と進は停し
 或は付のまゝ只身は趣向のく焼く付意とて
 付たりは流よりむと又其業を悟後より等子
 此世のまゝ千投着とてくまゝと定まり進力にて
 も浮流も出来ず又付のゆきぬるもあつぬ流
 は社中の徳者とおすといふ候あるなり○因去来
 の自分の白あると去来又よびり西行は熊園の村
 の人の侍と申すといふより西行も申すは年
 附千載集の撰とて年比の身出其業を後成

々へ御一侍其誣さく思ふく去来あり草
 流と成り乃守去来より西行は熊園の侍は侍
 と成りれとの又ふと流し又意あり

■ 扱くは去来くくる意をて 扱

▲ 去来撰集は入る身は扱て今冥加ある性るを
 其の件とて去来身の束由と分りり 扱くは去
 来くくる意をてと判老く辨むと家集を
 扱出するは扱ては去来身の性りの身空く成
 ば哀傷のかりし時詠多て或は女官のや或は女川の
 始末を月又る焼く事かきも果ぬ扱くは意
 としては乃今を去来やと候侍す趣向の固小町
 の老侍は田好きある女友の老き後白の意なり

■ ころむ世の果を皆小町あり 翁

▲ 去来扱くは去来くくる意をて今冥加ある性るを
 下効者皆侍とて去来又教き味よりく世の果の
 皆小町撰は侍の世とて扱るも終り

はくあふ髪と老て向後我のこゝろと世を
かみくる老女の作中宮仕の上臈の下を
て老あねる指く羅漢は白の寂指作のおを
遊て日この妻よふけ時のるの人情は移て志
うも酒の妻病よきれ一境界はけつる不味よ
味ありすう。固三む三々固小町の果は四小
町と入を定これと皆字廣しはモ皆敬之

三

□ 何れを彌するも候くこ 束
余の白字世の果は皆小町おれ因果の及理
を悟れよと寺たよえ迄又坊の教を行く
はと寺人老傍之老あれと老は葉のさまよひ
束を憐て出来合の彌持すは押戴さ候
あつよするさつふう何れと見れれ男の
因果を悟れよ白字の果は皆小町何れよと
去の因縁よて井の言さるるをとおる旅の
近づく△白字の傍のたと親情で持彌よ及

二

穿とさる固庵おれ老女は抱て昆る指只
ば(○)徳云すまよ下庵より所教く人と妻よす持
る指うと彌よすけく良と合うは持親也

■ お面まことおれ廣き板敷 北

▲あつよも字さあといはるる彌するもも候ふ
も候とあつ何れと朋輩の妙つたよと主人
の心を指持すなりお面まことおれ廣き板敷よ
二人又婦子連あつも連て入向より一あつ廣
き板敷は只二人彌さるる一人何れをちよれ
むとあつ山嶽のたき忠告をおあつ分て候しは
今一人のおきさるる心ちあつおあつ何れあつ
あつぬがあつおあつあつあつあつあつあつ
たの指よあつあつあつあつあつあつあつあつ
い肘あつぬい大板とんむらうあつあつあつあつ
固庵のたつ初持のる寺は薛さあつあつあつ
あつ何れまつあつあつあつあつあつあつあつ

□ 身のひきは虱迄する花の長 着
 集るの角をきけ推さ人も言れぬ直まの老
 の廣板を独り侍立入目きき聞と行こ
 りまの子は虱迄する花の長下目泳き言る
 きて暖める程庭のちの度よ日南北向する
 ちよ虱の迄出れいさむえきまひと身の平
 迄も入る程之△△戸信の爲に中家内を
 脱れぬ外に切板を二る程迄て葉の
 ぢの涼ちする程と田舎山は虱迄する言を
 及し宜庭は虱迄する程と作る酒房迄する
 の字花之長よー○固九寸の意の實とて
 意を付くり良あ又換の位とて

○ 虫居動ぬるのねむりさ 末
 集る花の長手れれもこの言ままは休するの言
 虱迄する侍立又坊の程を付くり度うとうぬ
 まの眠さまも言まは汗たる言居仕休する程

固接人良はし○田二句二意良あり

一 灰汁桶の事やとり 蒼 凡此
 中人舞いあく桶の事止るは蒼の物なる侍余
 情懐率にて物ぬは彷彿とするめむとら
 意を合せて夫女の言を以合くるは之なり

■ 油切すりて青採する秋 着
 亦も独位の裏方のろきまきま採受て漏るる
 止て蒼あきまきく侍立を採れぬかを行く
 り油切すりて青採するおきりとはは油言れ

い採るても油代は長すとらる親をなす
 と行病を油さるま採り入て青く採るま採れ
 採字目覚あくの言蒼の声をと採て採
 かては採する程△△家のまきま採る程

イ 採るまきま採るの自らも採る時分病と
 て採るまきま採るの自らも採る時分病と

するにせむれ情素の之を度世の力仙三卷
 翠の英流の草長と子符と同一 誣之自極と
 へるるをカスルは初雅俗をほしカスルハコスルハ二
 叩くおの摩くをわする用之高の草より取モ得ず
 りモ存を草の舟モ掬るモ口は之ハ天を草の草
 の庭を抄を汲干ふの草草をのじ草を
 てあい草版の急後の長吐をけり又儉を
 ちるを草ぬぬれ油情むを情情 救之
 油をきうして 救之秋中油をきうするあしむ
 や固く復守すすを離す其終り 摩摩草を
 終るを草採するを其老の舎其 採草を

□ 新草をあらわしむる月影よ 妙水
 春の秋ま快き物採るお勝の夫を傍て採吐
 する伴之を文飾の採を行ふ 採草をあらわす
 月影よお採まきするお庭を雅客と之と二人伯
 ては辺の秋の草ぬぬれいりきすす 月影ぬれ灯子

くるも心く足ゆくま客もすくみたる採の採
 〇固橋後の家ち或は採ちの傍に 固新を
 草のそ文ぬ 採人遠之

□ 垂へてうれー十乃 五五 去来
 春の月影の設は採草をあらわす 採吐と客
 採る採を行ふ 垂て採 十の草を採る引垂
 の古風を採の上たの傍の神をうてお採採
 子採採の人々あしむるも草のよはのこらけ
 する老の採を採るむ 〇固と客身は 固採宅
 の草は 固月の目は見えぬぬ

□ 千代経へきおと採る子の目で 菊
 春の十草上戸をうり採て使言を多く伴之と
 採る採る草を行ふ 千代経へきおと採る子
 の目でよまのぬぬれむのむ子出て千代経へきおと採
 とひき或は採る傍て腰を摩り 或は採美は和
 して口は吸り思をまてい 採る採と採る

法を以て人招くのをまねててアノ子も
生るおを引上げてめてくる世のおもをさうしんと
はのしく出守格之田舎集代代つきおをさか
うあつじも思ふ能く志しむわうしをば
うりきり○固子孫を園慶もて人おの
寧は園十の雲とよきとの子日とてアノ子も
おをば辞をまぬぬ

○ 号のまよたびくまふ
▲ 桑の千代ふき小松の世を推のまをを怪守
体走を更良をせたり号のまよたびくまふの
号も停号もアノ更余招くの雲ある招く○卅
系之の付良ハ一短也

■ 系出で勝はあするまの約 束
▲ 桑の白号あり世系ある日像は天宮吹くまをる体
上は正風は招くおをせたり号あり○世の面白
き道お手おの約もよ道ある相するまの侍の

号ありはまあ約を子めてはむと二報加
りまのり運風まをる人下まをるはれい
系とあじと身強ひけり未孫の扱は余り止
ふくると他よりて昔園の後王八後の天宮よ
字の山長庵は招遠は天宮よま釈世法をま
くすくす号のねは法をけくとあうく大方は
男も天宮まをるあじり天宮浪人の力でもま
てまのくと号の招く○固まをるまの約の
勇い招き一短也

■ 摩耶耶りまをるまのりかふる 水
▲ 固まをるまの約まをるまの松年傍まをるまの
招をせたりまやうまをるまのりかふるまの
山物利天上ちの歌まへ初午の日をまのりかふる
まをるまのりかふるまのりかふるまのりかふる
かふるまのりかふるまのりかふるまのりかふる
つるまのりかふるまのりかふるまのりかふる

あつり〇^三圃^三まき^三と勇をふる人の金を平ら
らぬと云ふ事なり其^三並^三也^三固^三拔^三也^三挿^三象^三

三ウ

□ 夕飯よ草子食へ風也とる 托
あつりまやま草子食へ風也とる 托
まの侍と云ふ所の指を付たり夕飯よ草子食へ
へれ風也とるト八眷戸の是座よ夕飯よ草子食へ
正座風也とるト此れ夕飯の支福ありしと傳
えりまやの今も草子食へ風也とるや今夕飯束
るれまきそ又今草子食へ風也とるや今夕飯束
め木くと毒の異様なきや戸の町家ありしト
カヌハ五日に於て佳之子其母ありて二之
毎種くハ尺余あり薙の也ますと云ふ其〇
固^三又^三中^三の^三芝^三系^三只^三二^三咫^三圍^三ト^三も^三く^三夕^三飯^三よ^三草^三子^三
と云ふ事夕飯よ草子食へ風也とるト其母挿象
也田家の侍其後白の惑也

□ 怪の口まをせきてお味よき 酒

あつり草子食へ風也とるト其母挿象也田家の侍其後白の惑也
又此流は投也とる指を付たり怪の口まをせきてお味
よきト田家の侍其後白の惑也
挿象よ草子食へ風也とるト其母挿象也田家の侍其後白の惑也
固^三又^三中^三の^三芝^三系^三只^三二^三咫^三圍^三ト^三も^三く^三夕^三飯^三よ^三草^三子^三
と云ふ事夕飯よ草子食へ風也とるト其母挿象也田家の侍其後白の惑也

五

□ お思ひよいて休む日一 水
あつり初に泥水を入怪よ草子食へ風也とるト其母挿象也田家の侍其後白の惑也
あつり今又草子食へ風也とるト其母挿象也田家の侍其後白の惑也
あつり女の子と草子食へ風也とるト其母挿象也田家の侍其後白の惑也
あつり入て水の中あり草子食へ風也とるト其母挿象也田家の侍其後白の惑也
あつり医のうさと草子食へ風也とるト其母挿象也田家の侍其後白の惑也
あつり痔をせきて草子食へ風也とるト其母挿象也田家の侍其後白の惑也
あつり痔をせきて草子食へ風也とるト其母挿象也田家の侍其後白の惑也

六

園の拾ぬく〇園二百五〇園守宅を休むるをわ

■ 逆せりき庭より一の文 末

集むおんりい庭下にてきて休む日は又庭下は又元氣
又吉成用を行なり正せりき庭より又元氣
先作き新集の尋く古集の如くやせじと幸り
おんりきささるる新集やと庭下行なり拾ぬく
は幸りぬい庭下をちやせきくと逆せりき
拾ぬくも古集の之おとりて拾ぬく固き集を
はくし〇西直長は後句の或ん

□ 庭下と人よ呼ぶる乃乃安き 菊

集むる庭下は人の呼ぶる乃乃安きと人よ
後集上金守人とは是れむ拾ぬく今集と人よ
呼ぶる乃のあきよ内福ある園利後人をいりき
君の口見ある子娘も存り何そた裁おま
らし結構な乃の上と人言のうやむ拾ぬく
田方集よ金集さすむむた金集良き後

ハ

集むる〇園の自向は後と集ぬ

■ おの風呂母乃乃吉の月 花

集むるスコカサ今集と人よ呼ぶる乃の安きは
と又吉成人の平生を行なりおんりき好の吉
の月よはせり集ぬくも終日意集りてか
ちく男方の毎おんりき入て乃の集する人
の又てテモ純肥とおと春集る拾ぬく固集の時
きぬ取にきり〇園おの人の用はあ

□ 町内の秋も又ちく好集ぬ 末

集むるおんりき好の人の集りて吉の月言は
互成防の拾ぬく町内の秋も又ちく好集ぬ
よ風る庚の集て角力カ拾ぬく又ちくよん
お好と又ちく拾ぬくは吉成用と集りて
集ぬく拾ぬくも中七字と改り〇園おの
の人よ集りて園成防は好集ぬの又集ぬ

■ 何をさるるも集ぬくあり 水

十

▲ある田舎町の町家者より又色く杖の代き付え
き其坊の歌歌とたり何と云ふもあせり
歌の極込又ても菜大根又ても只白ちあ乃
言さのくもくぬたを盛志必妻の歌と云
才船の國二白三意其何の並おこ

土ワ

■ 花とちの力い西会う夜忘て 霜
▲ある何と云ふもあせりなり一毎素と歌し出
ある体と又西行とたり花と匹ちの力い西
会う夜忘て人 西行 歌を相渡のふ面佐あ丸
ま未厨憲信九日と又又離れ九日と母は後
き宛は世の志ありある時匡方憲康も出あ乃
志と清れい信よあれむと仰る又叔憲康ら
男返りもあせりきい服と歌信れも許あり日
ぬりて保延三丁巳の八月俄に家とあむとす
まにまある娘の位慕られい極よりけあし出
て其のまゆれい又ああるおとれもあせり我乃

三

ありりり上詠持真幡寸のおたよりてあは松
川織部と信よ誓と松い西山持持寺西会上
人のあせりも法名田佐又西行とい織部
西位とい信よい花のちのあせり極く中
尾と信て仏はりり 山家集 法もは我も
してちりりむろく世といふあるあせりも
舎て西念の夜伴とあせりんと作りり○同と
花はヤウニのんあせり花は二のんあせり花の姿
と寸因八月白あせりあせりあせりあせり
とい年九三のあせりあせりあせりあせり
あせりあせりあせりあせりあせりあせり
あせりあせりあせりあせりあせりあせり
あせりあせりあせりあせりあせりあせり

■ 木乃の旅甚よまも言ワ 杞

▲ある花とちの力い西会う夜忘て 山家集 三は初又
と相あせりあせりあせりあせりあせりあせり
ままもあせりあせりあせりあせりあせりあせり

と志るる今風雅のおまをされ仮初ま入一は山
 ても那草の侍爲あつて人のままあつて別傳
 かくる麻十と只あつても去とそつたれと執着
 と思ひ守は我も及居生の力ありおととたん
 固の人と悪てさむけの心とせつて根木君の麻衣
 階くのくつるあつて母の侍とあつて因ふんハ矣
 別衣の漬菜之青葉は海草に加てゆく根ねり
 寸納豆のまよく白く引てねえりあつて飯のよま
 てらふ木君福島の秋辺の名おと方俗スレキは
 砂る集スイクキ下字集歳遊とあり片の國住
 ちる人の自由片めんを字の又あつて

■ 海らやら山隈傳ふに十卷 水

▲あつ木君は由縁あつてあつて人の山古の那草
 は止れて都のまもあつてあつてあつてあつて
 情と迷り海らやら山隈傳ふに十卷ハを
 時海はあつてあつてあつてあつてあつてあつて

りくとお作らる根の○固ま去よ海をの用は
 廿二の一云はモ並おく

□ は木さる家乃株とかくる 束

▲あつやち字山隈傳ふに十卷とさつてあつてあつて
 とい海らやらとあつてあつてあつてあつてあつて
 は木さる家の株とかくるハ農家際あつてあつて
 以て暖きれと根根の茂之する人々のまやに
 十卷と海らやらとあつてあつてあつてあつてあつて
 とあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 さつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 久は木さる家乃株とかくる草の海はモ並おく

□ 冬空の荒は草は北風 兆

▲あつ木さる家乃株とかくる冬空の荒は草は北風
 又は日和短とかくる冬空の荒は草は北風
 強らやちと株押する草は油のあつてあつてあつて
 ■ 海の池をよおつてあつてあつてあつてあつて

五

夫の占三タカハス争々其の意は成る小下凡と倭合
 テ其フ体上之更更工物子の用と付く子後池之
 子おのりおくは倭祝して休む時不事ある
 事合事よ力を付倭内は旅言れと打灯の
 其方よ直して休む小用よ記ておる若く老親
 一由くと女中老人おくるもさける振く△は句
 舟の弛まし作る時おす月之は由舟きる時
 火と灯さ守倭るし灯せとも海の時△と
 晴りりりて歩板より用んする事あるれい弛
 まの字つて舟はゆるく歩ゆるはは緩く守月
 して作る○三冊後言の言板△もこのま
 後句の然と固さひき体共一短し
 ■ 冷き女乃ちるゑもあて 束
 夫の後の弛まはまもこの女の弛まはゆる
 とまはゆるまもゆつとゆるわく体上之意の
 んと付くすまもさける女のゆるのゆるあて

六

七

今宵思あまむと約ちりおま更客の来る
 乃と見えむとん入るるおの思るるよあてた
 は人目せれて思りてささる振て女のちるい
 ちるさおと思ひ守振てささる○かハト夜は
 固振冊子を昌うあは信女の伯る傍共自他遠く
 □ 何ん物おんくみのみく 水
 夫のちる冷き女のゆるのちのちるあては河
 と之を思お振さ付く何ん物お振のあて声スル
 八山家の口舌おし男の孫よりこれと本声上て
 恨多き事を何れは振の振る声してあてると
 笑く音も振る冷き女は振る振るあてと
 をり○固二の三思共並お思あてて多さる
 息も振ると一曲共振る思
 ■ 夕月お思の昔振の思慮さる 菊
 夫の白尾むく思の思物よ振のおくささる実家
 上之ち思物よ夫人の用と付く夕月お思の

□ 橋田守の竹子出る種刀七八平生の竹あり○
廿春まふと井戸水とるより井戸水の徳討うよき
水うてまぢむとら水と承初てあつじとらふ
只様あふ合切と府人之徳と初てあつてまふ
人ありや

十

□ 又も大子の難と、れ出付 束
▲あひりつづきよ自悟してて皆かして接
ちひはれ又まふれお柄とけり自悟する
天物の主人の朋友の束とね 何と皆天物
教も正まの原也射の物むんまらふとら
も九子の古難の室おむとまらふとら
まらふとら難う寸何卒一喉開けめとい
もれてはよりとら難くけさると調出
すて足てはらも人よまられて振とらも再
大るが難とれ出ると家子あとの只まらて固
際上男あり○□つづきよ振とら難はわ

十一

□ 池も只水之体より文るもハマアの心
■ 橋より田の青やきと濁き 柁
▲あひ又も片及く各南の難の包箱し九出寸件
上之也世をの指とけりつづきよ田のまらさ
て摩きよはりきとて又二番のまらさつと
い又指を箱くを誘れらる人の大強おと枝
とら指之固世をハれり○□あつたの糸
うておへり付片様あり

十二

■ 加茂乃社いよやらあり 柁
▲あひつづきよモナリカ田のまらさて濁き
初とえとれは世の乃とけりやもの社いよ
まらさ社ありよ西うも上世辺の人を礼請す
てお張あきやつじむらもとたてて上
茂重うらもそ西神領のま田よ目とまら下
かもはつれいもや原林の原風よみまらするん地
一まは念社いよとらまらあひのまらとまら

一

志く招く△よりヨリヤルは又之塵きは
 ヲ神燈と起情し六月晦日紅宮に被あり
 社に下イワテモは河と合さる○固長堤の
 移感すくは地利ふ事内之長堤より社に定
 えす又又のりても又またのありも初す
 おさかもあさりと又さるは西二百一十て橋の
 延くはまつま一芝の風洞と洞を若の二風は
 毛並れ之毛あり堤より田の毛せきて又さるよ
 トあははるいけさると又もワヤんはむ
 ■ 社家の尻声なく久々子控 束
 ▲あらかもの社イワテモよき社ありトえさる
 ル体と又直不乃通子事人さ行なりおまたの尻
 声さく久の控ト又おくと海ワ社とよそ
 又社家町とさく招く○固尻声さくといふ
 ひき社家の家店の被方は方よ敷板はく
 信る体は又西遠之定トかもあす上のもあ

二

ぞさうでい宮ト社家町上御あす尺籠美の
 町のさくさくはくはく門梅の招き也又ハ社方
 は方よ敷板の家あり一軒ト也さういけす
 ■ 乃乃舎は常迅速 水
 ▲あひ名のう控後さり又すをりト体ト又直
 多るさまのく招き行なりるの舎乃常迅速
 速トちの門又直て強込さる人この信る荷
 おの良ある招き打眺本まはお林くつら
 控さすてア人の身の健あるもれぬすま天
 も曲りあすいりかのとくちつて来るやらと
 おお新獲の世のお招きと教する招き急あま
 迅速の作り団のハノ如きのんは団れより
 ○固長堤てあくまきる体は非く
 ■ 又眠る事寝るの身はたさきま 海
 固あひる舎の人のア人おすも一村ものさる
 有あると力をえらあひ体ト又直おの度又を

三

養志を付く片^一▲六夕^一をその舎の傍
 い水辺の林^一の石をく^一る傍と^一る^一は^一終^一
 のはつらりと木の根は眠^一るを^一て人^一の根^一
 てまき^一つくと^一る^一眠^一めてお^一る^一終^一る^一人^一は^一終^一
 りてま^一き^一志^一ある^一いと^一ま^一の^一境^一ぬ^一と^一思^一や^一
 招^一く^一人^一と^一そ^一端^一る^一姿^一と^一る^一眠^一る^一作^一
 する^一を^一——^一評^一世^一の^一事^一を^一立^一發^一む^一よう^一終^一る^一
 何ん^一か^一ま^一眠^一む^一む^一——^一は^一——^一○^一卍^一た^一ぶ^一と^一
 之俗^一の^一ま^一ぶ^一と^一ま^一は^一——^一ま^一終^一る^一の^一安^一ん^一は^一眠^一めて
 人^一は^一と^一れ^一果^一い^一庭^一下^一の^一石^一を^一突^一る^一も^一ま^一ぬ^一ま^一ぶ^一と
 き^一わ^一と^一説^一する^一体^一は^一誣^一ま^一こ^一ん^一終^一る^一ま^一ぶ^一と^一は^一
 作^一ま^一さ^一る^一も^一う^一ま^一た^一ぶ^一と^一は^一ま^一さ^一詞^一を^一採^一出^一する^一
 矣^一後^一不^一足^一し^一眠^一ると^一又^一る^一——^一ぬ^一
 ■ 志^一ま^一ろ^一く^一水^一は^一菖^一の^一秋^一くら^一む^一也^一 北
 ▲ 翁^一白^一水^一辺^一は^一つ^一くと^一ま^一る^一終^一る^一の^一眠^一る^一風^一情^一ある^一
 と^一又^一て^一ま^一い^一水^一を^一う^一ま^一る^一は^一詞^一を^一ま^一す^一更^一補^一の^一招

四

を^一付^一く^一ま^一ろ^一く^一水^一は^一風^一を^一て^一菖^一の^一そ^一ろ^一也^一ト
 ア^一菖^一の^一石^一白^一く^一秋^一も^一ま^一る^一眠^一る^一は^一涼^一風
 は^一快^一き^一ま^一や^一え^一る^一む^一と^一眠^一る^一招^一く^一水^一は^一下^一風
 流^一て^一は^一詞^一を^一ま^一る^一○^一ら^一む^一也^一ト^一改^一と^一固
 比^一無^一の^一謬^一は^一団^一協^一射^一を^一並^一む^一也

五

■ 糸^一梅^一後^一も^一ん^一は^一嘆^一尔^一り^一 東
 ▲ 翁^一も^一風^一も^一吹^一ぬ^一は^一菖^一の^一秋^一も^一ま^一ろ^一く^一水^一の^一初^一す
 む^一は^一詞^一を^一ま^一る^一天^一之^一風^一の^一招^一を^一付^一く^一糸^一梅
 後^一も^一ん^一は^一嘆^一尔^一り^一ト^一大^一家^一の^一林^一泉^一を^一む^一形^一を
 く^一意^一下^一て^一そ^一ろ^一と^一ま^一ぬ^一滿^一元^一の^一姿^一は^一又^一比
 て^一菖^一の^一秋^一を^一怪^一む^一招^一く^一——^一後^一末^一日^一花^一を^一梅^一ま^一ろ^一
 む^一と^一ま^一終^一日^一を^一い^一く^一ま^一東^一日^一早^一ま^一を^一む^一梅^一を^一の^一ろ^一
 ま^一と^一思^一付^一く^一菖^一日^一を^一い^一く^一古^一人^一に^一中^一の^一内^一一^一本^一を
 梅^一を^一付^一く^一い^一ふ^一も^一あ^一る^一ま^一あ^一る^一付^一され^一と^一は^一菖
 の^一梅^一も^一い^一つ^一る^一お^一冷^一あ^一る^一い^一ま^一は^一お^一ひ^一て^一糸^一梅
 後^一も^一ん^一は^一嘆^一尔^一り^一ト^一我^一後^一と^一又^一る^一下^一梅^一を^一招^一く^一

心ト波ておぼし一匡宮の出入仕さよお病
の上薬を痛て斤原は居あるるよ二世の客の
ち下とあぬ件共秋字又居て一匡宮とゆふ
る挿振共自他遠く

□ 放やる勢のあま又くりせす 男

余白二世の客のまれと秋字申は句と又と放生
会の振を付たり放やる勢のあま又くりせす
ハ固けちの尾あき振よりびるち下尾振うち
くして浪人度いはいらちちくらむと勢の
あまのえさるま振てそと振り○廿二世の客の
まらるる原は勢のわ方うえす共極らえまら
て秋字すすくはあまをまはま邪广ふ客を
ませし後の噂あるそ

■ 稻乃葉庭の力あき風 取

余白アヤマキテ放やる勢のあま又くりせす
又と又坊の振を付たり稻の葉庭の力あき風

トセのくねりお勢をれ外て本意ふるを
アカシと又坊の流れてそと振く△稻の葉庭
いふ月比の件そ風稀ある日の振を力あき風ト
准て依たり○徳正ワとと振る坊の付は力あき
くえと極極極極秋字は極極

■ 癸心の始り越る鈴鹿山 菊

余白稻葉子の力あき振をえてり末是末あく
たうの接合えとけり柿の秋を付たり癸心の始
りまの治ふ山山家集始は実ま西り行柿の初
来ふへりしるを思ふてくうたり山家集終は山家世
をよそは振持てくまありや秋力あきし癸
心の始りくみ細き風情力あき山家集としてい
と哀く○天長時あは世苗代の水も移てえゆふ
稻との中世秋の伏控ふ山家集とてうらなぬねの夏
跡の末は秋をそとく長時と癸心集あは長時は
必定たり共極極極極一極極

▲ある門田の者さ徳の追ち守体よと迄親之懐
 多しなる指をけり△は付てあーまは初
 の已る束合より体よと△川治よかい哀なる
 土柱よは為徳捨く者ちして堪えて初め
 子徳安傷をえて二名の性徳更徳と親
 する指あつて斤よは指もあむ○固きも
 あり新て田方立の件は種も更あつて大なる
 懐多する方の月よとていさ守徳と准付
 二と流ききる△中平録に付り

十ウ

▲ある倭屋の船及のそてら懐多して天
 部なる件よと迄更徳の指をけり夕空るぬ
 舟のあむよ傍よ客のおてもや月の中室ち
 がけいあつと昆るよ外あつ夕の備千も
 空る守と厚根又て此守指く空るよ懐
 多の人二三人あつ△内あき奈は徳ゆの思居

何彼の町戸西門者も向南のそ後さかの
 関は比の迫門の内とせと内多し月の出入よ
 取て備年よ低を延あつ又二月の内大夕
 小夕あり外あつ備千僅尺もろく疎を子寺
 時よ月よ吸守風の日に信をてつさきとト
 固天を何と△○廿月よ夕の付はあー

土

□ 徒の柄よちすろくろ花の考 去末
 ▲ある夕空るぬき始て修る人の言辰よん徳
 件よと迄はま指をけり徒の柄よちすろく
 新る花の考よハ戦号る武士の為延むと備
 思よ出て舟を指く夕空るのおさひく傍よ修る
 款もあき指く固勇士のはあつと△ハト

土

□ 一灰まきちり守かりせ米乃治 北
 ▲ある花の考の暖きよ強目あり号る供の徒
 子ろく修る件よと迄ま指をけりろく灰をち

寸女子菜の位より班位者の門前の供行は眠
あつたうきこの畑は所ち寸灰の風をわ
く吹けるは目定一六たす寸と看板の度袖
おれは拾へ灰の目よりむ拾をすむと女子
菜の末をき用へる固門外の供行は○西の
の人乃師の变化は並む

■ 十去の日は仕してぬる徑机 正秀
▲ 翁白飯を珍ま忙しく灰所ち寸体ト又志
所後れは坊のせけり所後を後ちりい言
い定末とまより止拾畑中のちの葉千部く
以下男ち内の聖菜を供ちり女子菜の位より
何極むとんく部く寸部中さ留られ時後
後と若くやうくより十日の満月とては
机はこてぬると行くは坊の孩さとして
所ち寸拾ぬ僕と寸人皆こころ志ある拾
く○園圃の傍の灰と寸拾は悦ん

■ 店屋あつて供乃手取り 末
▲ 翁の位は大法令より集り傍の各論を件ト全
又乃翁の位をけり店屋あつて供の系代トハ
連立ぬる傍の位との可病坊とて是仕度する後
く△あり定良あれは度そ傍の方をけり○固
傍の供あつて八浦ある傍車の後より根は○西
の傍を度家とて供多く連くる件は持家之
店屋あつて寸ち中の中そ

□ 汗拭襦の即乃緋の糸 末
▲ 翁の系代は寸代入代おる店の後ト又志
根敷をけり汗拭襦の下の緋の糸は度機
上田舎侍の供との兼忽よれ連巴うま拭ふ
かか登てくれは緋糸の下うおと度機を
する拾接刻ぬ体又こをり固ま寸拾
はり○西二白二葉は並む
□ 翁せちりさ 翁乃下 末芳

ある汗拭く大徳の子は祖の字はかり足日と
 と又ち園うりよ良の振を付りおせそくまの
 の声、トトハ八声の響く響てはしゆしと外
 面よ出表をすしうて手拭必出を論て二人
 良れも心考つまよ振をひる振之固志
 おとえてせちしと付り片ハト一〇廿新樹
 約トトそお下作はま表之

五

大徳は思ふれぬ意をして 所
 事おせそくま人目よをうてはぬぬ方の園
 束る件ト又ちやとあき娘の振を付り大徳は
 思ふぬ意をうてト一園よ思清なる女は後
 矢も寄す通えれと登てははさすく人目の
 加く思ふ心付と加の振の運付ト一〇廿新樹
 の想て葉平の梅あけり付をうて思付む
 〇云右トせお世おむあけは振よをぬきとて
 けのまごきよはては思付をうつり付は振

六

女陸奥の女は我宿をれ大徳の心は影の振
 なるも人磨籍と恨し中をれは白の影を振
 する竹も守新宮の位は影いふれと大徳の意
 付り三目お清りて位の高振をうてのこ
 力い傷紙乃れ表あき

大徳は思ふれぬ意をうてはぬぬ方の園
 束る件ト又ちやとあき娘の振を付り大徳は
 思ふぬ意をうてト一園よ思清なる女は後
 矢も寄す通えれと登てははさすく人目の
 加く思ふ心付と加の振の運付ト一〇廿新樹
 の想て葉平の梅あけり付をうて思付む
 〇云右トせお世おむあけは振よをぬきとて
 けのまごきよはては思付をうつり付は振

□ 小刀の拾ひある御工お 所

素白の儀紙等万子等個法ある居所の
 出物する体上備極又立艾柄の指をけり
 小刀の拾及物の子ねよ志のき丸き小刀
 の糸丸るもは法換る儀紙等け居るを
 指とえて何きてもかくの工くして生置れ
 不向き田力と物とお突子指之國職人身合以
 指とて拾及ある小刀のあふきまの竹をさる
 うしは裁入片○固釋多は田大工はそふか
 □ 糊は火灯を大年の秋 園風
 素白の物に等しいあしく人よえする体上之飾
 等心指をけり 糊は火灯を大年の秋よま
 きり削るきりと職人くと物に等なる糊は
 上飾して灯の上より持持して旦をう
 ○固ま又の物に等なる糊は指は田師のせ
 ちきま切ぬ刀を物に等するとえて并糊の打
 指る指をけり 等物より行きぬはこ

ハチ

九

□ 安許の只よ使もすまは備 様能
 素白大年の火灯上り空しく等々一とせよ
 体上之他位の指を述より安許の只よ使も
 すすまの備上眾あて物より近き一人の
 人使をよまよまよまはれと未教免のさても
 物れは手立物とよまも床く火灯かけて
 氏神祈。指之固きま一人の係氏スき園風
 安えよまある心地とよ物と指をけり ○田
 糊の打を神宮の火灯とえて素白の山鳥不
 いせより係氏く係氏の傍は素白自他遠之
 指よまよま大年の指はいせの使はまあま
 □ 袖打合をきく 肩衣 袴
 素白安許の只よまに使も頃廣の備へりは
 袖とえちよ出る指をけり 袖打合をきく
 肩衣は陸州の山鳥肩より舟使借てスき
 指する人今スきより舟よまきとて

十

備の衣より用いしる者までい男が儀は止
 て定符す。教と女房打ちて天下晴る
 る夫婦中の性^⑧おれいさくも大子あまをせらお
 をさる猪^⑨あつ居くもさる後^⑩くの人を教ぢや
 けくもさる指^⑪△コク^⑫レハ斤梅冬へ千カキ^⑬
 甲一編屈止ま^⑭○^⑮無^⑯星^⑰正直ホユ面^⑱ハ^⑲根^⑳
御書許^㉑之^㉒日^㉓海^㉔字^㉕ま^㉖白^㉗の^㉘字^㉙こ^㉚の^㉛お^㉜い^㉝る^㉞程^㉟と^㊱ま
 じ^㊲り^㊳ 辨^㊴白^㊵の^㊶れ^㊷い^㊸る^㊹程^㊺す^㊻る^㊼付^㊽の^㊾隣^㊿よ[㋀]せ[㋁]く[㋂]人
 の[㋃]表[㋄]の[㋅]字[㋆]よ[㋇]成[㋈]て[㋉]附[㋊]れ[㋋]る[㋌]又[㋍]候[㋎]て[㋏]表[㋐]の[㋑]客[㋒]乱[㋓]
 指[㋔]と[㋕]ま[㋖]く[㋗]め[㋘]人[㋙]と[㋚]い[㋛]ま[㋜]む[㋝]程[㋞]す[㋟]候[㋠]候[㋡]あ[㋢]ら[㋣]せ[㋤]う[㋥]
 び[㋦]子[㋧]教[㋨]は[㋩]極[㋪]む[㋫]ひ[㋬]さ[㋭]る[㋮]浮[㋯]去[㋰]は[㋱]付[㋲]れ[㋳]と[㋴]少[㋵]換[㋶]し[㋷]ふ
 へ[㋸]む[㋹]卍[㋺]儀[㋻]より[㋼]悪[㋽]末[㋾]る[㋿]又^㊀は^㊁換^㊂る^㊃あ^㊄ら^㊅末^㊆る^㊇人
 あ^㊈ら^㊉戸[㊊]と[㊋]爲[㊌]て[㊍]表[㊎]の[㊏]さ[㊐]も[㊑]む[㊒]程[㊓]あ[㊔]ら[㊕]
 □ [㊖]か[㊗]ち[㊘]あ[㊙]ら[㊚]し[㊛]画[㊜]と[㊝]あ[㊞]ら[㊟]る[㊠]舎[㊡]は[㊢]舎[㊣] 嵐[㊤]業[㊥]
 業[㊦]白[㊧]ま[㊨]く[㊩]め[㊪]の[㊫]表[㊬]て[㊭]あ[㊮]ら[㊯]る[㊰]あ^㊱ら^㊲友^㊳の^㊴末^㊵て^㊶御^㊷お^㊸の^㊹付^㊺あ^㊻ら^㊼
 程^㊽ま^㊾く^㊿の[㋀]人[㋁]共[㋂]は[㋃]初[㋄]と[㋅]又[㋆]は[㋇]業[㋈]と[㋉]ま[㋊]る[㋋]程[㋌]と[㋍]付[㋎]

とう^①空^②合^③あ^④ら^⑤し^⑥画^⑦と^⑧あ^⑨ら^⑩る^⑪舎^⑫は^⑬舎^⑭ 俵^⑮車^⑯跡^⑰
 又^⑱指^⑲子^⑳花^㉑と^㉒葉^㉓も^㉔跡^㉕も^㉖程^㉗も^㉘合^㉙ら^㉚ぬ^㉛を^㉜
 う^㉝子^㉞車^㉟と^㊱あ^㊲ら^㊳し^㊴程^㊵あ^㊶ら^㊷お^㊸の^㊹性^㊺と^㊻あ^㊼ら^㊽ぬ^㊾も^㊿
 い[㋀]酒[㋁]あ[㋂]ら[㋃]し[㋄]あ[㋅]ら[㋆]あ[㋇]ら[㋈]と[㋉]あ[㋊]ら[㋋]い[㋌]ア[㋍]そ[㋎]く[㋏]て[㋐]
 そ[㋑]う[㋒]程[㋓]へ[㋔]ち[㋕]あ[㋖]ら[㋗]う[㋘]い[㋙]男[㋚]ぢ[㋛]や[㋜]は[㋝]又[㋞]あ[㋟]ら[㋠]し[㋡]
 似[㋢]合[㋣]し[㋤]画[㋥]い[㋦]妙[㋧]は[㋨]似[㋩]ら[㋪]る[㋫]あ[㋬]ら[㋭]人[㋮]ら[㋯]は[㋰]い[㋱]て[㋲]又[㋳]
 ち[㋴]て[㋵]ら[㋶]ぬ[㋷]ら[㋸]あ[㋹]ら[㋺]し[㋻]と[㋼]又[㋽]は[㋾]指[㋿]△^㊀舎^㊁は^㊂舎^㊃い^㊄
 ま^㊅ま^㊆舎^㊇は^㊈悪^㊉係[㊊]り[㊋]て[㊌]初[㊍]毛[㊎]虫[㊏]の[㊐]乱[㊑]画[㊒]や[㊓]
 あ[㊔]ら[㊕]今[㊖]製[㊗]い[㊘]花[㊙]あ[㊚]ら[㊛]後[㊜]て[㊝]古[㊞]字[㊟]と[㊠]又[㊡]は[㊢]○[㊣]画[㊤]
 舎[㊥]跡[㊦]の[㊧]字[㊨]は[㊩]卍[㊪]と[㊫]く[㊬]め[㊭]ん[㊮]あ[㊯]ら[㊰]ぬ^㊱す^㊲は^㊳
 け^㊴も^㊵あ^㊶ら^㊷ぬ^㊸さ^㊹ら^㊺ぬ^㊻
 ■ ^㊼舎^㊽の^㊾形^㊿を[㋀]画[㋁]と[㋂]あ[㋃]ら[㋄]す[㋅]て[㋆]ま[㋇]の[㋈]古[㋉]雅[㋊]と[㋋]
 ち[㋌]や[㋍]ら[㋎]作[㋏]ら[㋐]ぬ[㋑]又[㋒]は[㋓]枝[㋔]の[㋕]指[㋖]と[㋗]あ[㋘]ら[㋙]す[㋚]て[㋛]三[㋜]茶[㋝]人[㋞]の[㋟]
 ち[㋠]は[㋡]い[㋢]ら[㋣]ぬ[㋤]口[㋥]加[㋦]の[㋧]客[㋨]と[㋩]あ[㋪]ら[㋫]ぬ[㋬]死[㋭]極[㋮]端[㋯]は[㋰]出[㋱]
 表[㋲]は[㋳]よ[㋴]ら[㋵]ぬ[㋶]と[㋷]皆[㋸]段[㋹]と[㋺]あ[㋻]ら[㋼]す[㋽]て[㋾]は[㋿]作^㊀の^㊁割^㊂下^㊃結^㊄よ^㊅

	○	●	□	□	■	■	□	□	■	■	瓠		
五		二	二	二	一	二	七	七	七	五	昂	三	木
五	一		二	三	五	尺	三	六	三	八	昂	五	木
五	一	二	二		六	二	六	八	尺	尺	○	五	漢
五	一	一	三		七	二	七	十	一	三		九	魚
五	一	一			五	二	五	十	七	三	昂	兩	魚
												猿	
五	一		一		六	三	七	十	二	五	昂	尺	吉
五		二	二		三	二	六	七	五	八	昂	五	市
五	一	一	二	一	五	二	三	七	九	尺	○	尺	尺
五		一			七	一	八	九	五	尺	昂	五	尺



